

信じないでください
真実をみてください

神学博士 心理学博士
佐藤康行
SATO Yasuyuki

なぜ人は神頼みするの
か？

神さまの本当の姿
仏さまの本当の姿

*Don't believe
See Shinga*

図解入り

神頼みの効果を本書で徹底検証する

ハギジン出版

プロローグ

「ああ、神さま！ 仏さま！」

思わず口にしてしまうこの言葉。

あなたが追い詰められて逃げようのない苦しい状況に直面した時、きゅうち窮地に立たされた時、信仰があるうがなかるうが、天に向かって無意識に叫ぶ。

「神さま」「仏さま」

って、いったい誰のことですか？

なぜ、私たちは「神頼み」するのでしょうか？

これが、本書のテーマです。

しかし、私は何か特定の宗教を本書で説くわけではありません。教えや考え方を示す本でもありません。

何かを信じてもらおう、などとも思っていないせん。

「神さま」という言葉は誰でも知っているのに、では、その神さまってどんな人ですか？

と問われて、いったい誰が答えられるのでしょうか。

「仏さま」と言って手を合わせているけど、では、その拝んでいる仏さまって、どこにいるの？

そう聞かれて、いったい誰が教えてくれるのでしょうか。

あなたは答えられますか？

文化庁の「宗教年鑑」によると、日本人の宗教人口は2億人前後で推移しています。

日本の総人口の200%近い宗教人口なのです。

だけど、おかしいと思いませんか。

もしそれだけ浸透しているのなら、一般の人がふだんからもっと熱心に宗教を勉強しているだろうし、本屋さんにも、もっと宗教の本があふれているはずです。

しかし、現実には本屋さんに並んでいる宗教関係の本は少なく、しかも、かなり専門的で難解です。

一般の人がすぐに読めるようなものが見当たりません。

そして、読んだところで明日の仕事にどう生かせるものなのか、わからないものが多いのです。

宗教は、困ったり悩んだりした人を救うためにあるのだから、本当は生活に使えなくてはならないはずです。

誰もが手軽に使って、家庭や仕事に生かせなくてはならないはずで

一方で、日本人は宗教に対する帰属意識が薄く、自分を無宗教と考える人も多いのです。

そして、外国には、無宗教な人は信頼されない文化も多くありますが、日本人は宗教に熱心だと、何となく引いてしまう風潮があります。

それどころか、「宗教お断り」などと言って毛嫌いする人もいるのです。あなたは、どうでしょうか。

あなたは、何かの宗教を信仰していますか。

もし、そうだとしたら、**いったい何を求めて信仰しているのでしょうか。**

どういう成果がありましたか。

あなたは、お正月になると神社に手を合わせに行きますか。

だとしたら、**何のために手を合わせているのでしょうか。**

何をお願いしているのですか。

無病息災・商売繁盛ですか。

そして、本当に効果があると思っっているのですか。

それとも、単なる習慣で神社に行っているのですか。

現代は、インターネットで瞬時に世界中の情報にアクセスできるような技術が発達しています。

そんな時代に、存在のわからないものに手を合わせたり、お願い事をして
いるのです。

ちよつと、おかしいと思いませんか。

神さまが、いったいどういう存在で、どういう力をもっていて、あなたの生活にどう生かせるのか、できるなら、わかったほうがいいと思いませんか？

いざという時だけは、とっさに助けを請うのに、その実体を知ろうともせず、あまりにも無関心というのはちよつと虫がいい話ではありませんか。

2001年、9月11日に起きた、ニューヨークの同時多発テロも「ジハード」と言って神さまのために行う戦い、「聖戦」だとテロリストは主張しています。

そのために命を落とすことも厭いとわれないのです。

自分の命よりも大切だという思いで、信じて行っているのです。

彼らは命を引き換えにしてもいい、それほどの価値を感じているのでしよう。当然、彼らの行為が人間として許されないことは、言うまでもありません。

ただ、命よりも価値を感じている、その宗教の実体は何なのでしょうか。あなたは、どう思いますか。

それほど価値あるものが、今、あなたの身の周りにどれだけあるでしょうか。

あなたの命と引き換えにしてもいいものは何ですか。

あなたの預金通帳ですか。

あなたの家ですか。

あなたの乗っている高級車ですか。

大事にもっている宝石ですか。

それに、どんなに価値を感じていたとしても、もしあなたがこの世を去ったら、それはあの世にもって行けませんからゼロになります。

もし、命と引き換えにしてもいくらい価値あるものがあるとしたら、あなたはそれを知らずに人生を終えることができますか。

その価値あるものを明確に知って、それを手に入れて、これからの人生を生きられたらいいのではないですか。

繰り返しますが、私は何も、本書で何かの宗教の信仰を奨励するつもりはありません。

しかし、原始宗教といって、腰に毛皮をつけて槍をもっていた時代から、宗教はあったと言われています。

ということは、私たち人間の知識が発達する前から、衣食住と同じように必要なものであり、もともと本能的にもっているものなのではないでしょうか。

そして、ずっと何千年、何万年となくならないのです。

もし、必要のないものだったら、なくなっただけです。

しかし、実際にはなくならないどころか、伝統宗教に対する信仰が再燃したり、新興宗教がどんどん増えてきたりしています。

では、人々は宗教に何を期待しているのでしょうか。

何か、機能があって、それが生活に役に立つとか、利益を受けるとか、そ

ういった何かがあつて初めて人々は必要性を認めます。

そうであるなら、宗教はどのような利益があるのでしようか。

どのような必要性があるのでしようか。

どのような価値があるのでしようか。

そのへんがどうもよくわからない。

わからないから一般的に宗教では「信じなさい」と頭ごなしに繰り返し言います。

しかし、人間は社会の中で「信じる」ことと同時に、「疑う」ことの裏表の中で生活しています。

たとえば、人と約束をしたり、人に預け物をしたりするのは「信じる」ことが根底にあります。

しかし、そのあなたが、家の鍵を閉めていくのは「信じない」からです。もし、すべての人間を信じていれば戸締りをしていく必要がないのです。

「疑う」ことも必要だ、と言うことを無意識に認めているのです。

だとしたら、「信じなさい」という宗教だけでなく、「疑いなさい」という宗教があってもおかしくないのではありませんか。

もし本物ならば、「疑う」ことによって、より真実が見えてくるのではないのでしょうか。

本物のダイヤモンドは、いくら疑われてもビクともしません。

「信じなさい」と言うのは、「目をつぶりなさい」ということと同じです。

「疑いなさい」は、「しっかり見なさい」ということです。

「信じること」の大切さは、私も十分、理解しているつもりです。

しかし、「信じる」ためにも、一度「疑ってみる」必要があるのではないのでしょうか。

あなたが、車や家などの高価な買い物をする時には、最初から目をつぶって、丸飲みしないはずですよ。

プロローグ

そういう意味では、科学者の姿勢は素晴らしいのです。

実証を重ね、同じ条件で、同じ結果が出ることを繰り返して、初めて仮説を検証して発表していきます。

しかし、科学者も、最終的に突き詰めて、「神さま」「仏さま」の領域になると、「サムシンググレート」と言って「よくわからない。だけど偉大なる何かがある」となるのです。

あなたは信じられないものを信じようとしなくてもいいのです。

そのかわりに、真実を見てください。

本書は、あなたが「神さま」「仏さま」の本当の姿を見るためのプログラムのなっています。

本書を通して読めば、あなたは「神さま」「仏さま」の本当の姿を見ることができ、「神頼み」のメカニズムが明快になります。

構成は次のとおりです。

まず第1章、「神頼みと心の世界」はウォーミングアップです。
現在、社会が「神さま」や「仏さま」をどのようにとらえているのか、また、宗教と社会との関係が中心です。

次に、第2章「心における横の法則・縦の法則」に入ります。
ここで、本書の内容の軸となる二つの法則、「横の法則」と「縦の法則」を確認します。

「横の法則」は心の法則、「縦の法則」は神・仏の法則です。
本書では、この二つの法則を使って、あなたに「神さま」「仏さま」、つまり、手を合わせているものの実態をお見せすることになります。

そして、第3章の「本当の自分（宇宙意識・真我^{しんが}）」で、私がお話する

ことすべてのバックボーンとなっている「本当の自分（宇宙意識・真我^{しんが}）」
というものについて解説します。

その上で、第4章「三つのフィルターを取り外す」に入ります。

この章では、あなたが「神さま」「仏さま」を見ることを妨げている、三つの障害をそれぞれ扱います。

三つの障害とは、「欲望」、「感情」、「肉体」です。

この三つの障害は、私たちの心の中にある三種類の色つきのフィルターです。

三つのフィルターを外し終えた時、あなたの目には、「神さま」「仏さま」の姿がはっきりと映っていることでしょう。

しかし、これで終わりではありません。

第5章「神さま・仏さまの本当の姿」では、「神さま」「仏さま」の意志に

沿った生き方を具体的に解説します。

この章は、社会レベルでの実践を説明する「社会編」と、個人レベルでの実践を説明する「個人編」に分かれています。

ここで、マクロレベル・ミクロレベル両方で、「神さま」「仏さま」を深く知り、それを日常に生かす方法を提示します。

もう一度聞きます。

「神さま」って何ですか。

「仏さま」って誰のことですか。

あなたは絵に描けますか。

言葉で言い表せますか。

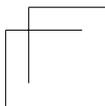
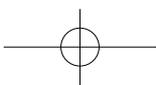
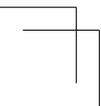
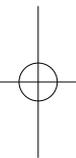
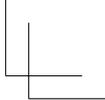
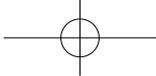
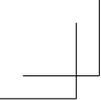
今こそ、私たちは真剣にわからないものをわかるようにしていく必要があ

プロローグ

ると思いませんか。

命と引き換えにしても価値あるものなら、わかるようにしませんか。
私と一緒に。

佐藤康行



なぜ人は神頼みするのか？

Contents

【目次】

第1章 神頼みと心の世界

- ・心の時代に必要なこと — 24
- ・頭でわかつても意味がない — 28
- ・魂の世界も駆伝スタイルに — 32
- ・人のためか、自分のためか — 36
- ・なぜ、宗教戦争は起きるの？ — 42

第2章 心における横の法則・縦の法則

- ・あなたの心を支配する原因と結果の鎖 — 横の法則 — 50
- ・願いは叶えられましたか？ — 54

- ・心にくいつのスイッチをおもちですか？—— 59
- ・今も身体に働く見えない力をご存知ですか？—— 63
- ・時空のしがらみから解放する絶対法則——縦の法則—— 66
- ・最愛の人に愛されていますか？—— 78
- ・あなたは起きてます？ 眠ってます？—— 84
- ・生きる力とは、生かす力—— 87
- ・どちらにいますか？ 「変わる世界」と「変わらない世界」—— 89
- ・「縦の法則」は元に戻る力—— 98
- ・本当に自分の意思で読んでいますか？—— 102

第3章 本当の自分（宇宙意識・真我^{しんが}）

- ・心の三層構造—— 110
- ・心の第一層「観念」—— 112

- ・心の第二層「業・カルマ」——115
- ・心の第三層「真我」——123
- ・真我の覚醒——126
- ・ダイヤモンドとイミテーション——132
- ・「聖書」も「仏典」もあなたの中にある——139
- ・すべては一つ——143

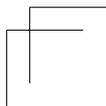
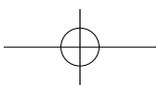
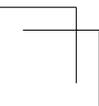
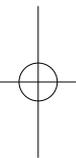
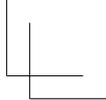
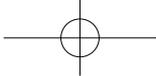
第4章 三つのフィルターを取り外す

- ・「欲望のフィルター」を外す——153
- ① 「横の法則」の視点から見た世界——欲望編
- ② 「縦の法則」の視点から見た世界——欲望編
- ・「感情のフィルター」を外す——173
- ① 「横の法則」の視点から見た世界——感情編

- ② 「縦の法則」の視点から見た世界―感情編
- ・「肉体のフィルター」を外す― 183
- ① 「横の法則」の視点から見た世界―肉体編
- ② 「縦の法則」の視点から見た世界―肉体編

第5章 神さま・仏さまの本当の姿

- ・「縦の法則」に沿うということ― 206
- ・それぞれの個性を生かす理想の家族― 213
- ・仕事の本質とは― 217
- ・奪い合いから、与え合いの豊かな時代へ― 221
- ・小聖は山で悟り、大聖は街で悟る― 229
- エピソード― 232



神頼みと心の世界

第

1

章

心の時代に必要なこと

二十一世紀は「心の時代」と言われています。

しかし、実態はどうでしょう。

「心の世界≡宗教」と考え、毛嫌いする人さえいます。

だからといって、このまま避けつづけるわけにはいきません。

なぜなら、心の世界のことは私たちが生きていく上で、最も大切なことだからです。

ぜひ、冷静に「心」と向き合ってみましょう。

今までは、知識偏重の時代といっても過言ではありません。しかし今、人間の知恵が人類自らの首を絞めようとしています。

ライオンの牙は他の動物を捕獲するために必要なものです。しかし、必要以上に伸びたとしたら、逆に牙が邪魔になって、自滅を余儀なくされてしま

うでしよう。

今まさに、人類はそのような事態にあるのです。

私たちの脳が肥大化したことによって、自らを絶滅に追いやる危険性があるのです。

多くの人々が、科学がさらに発達すれば、人類は繁栄しつづけると考えています。

しかし、それは大きな間違いです。人間の住む環境の危険度は増すばかりです。地球温暖化、環境破壊……誰かが核兵器のボタンを誤って押せば、地球は破滅どころか消滅の危険性さえあるのです。

以前、テレビで、ノーベル賞を受賞された方を始めとする、世界トップクラスの科学者を集めた討論番組がありました。

その中で、ある方が「魂とは何でしょうか？」と質問を投げかけたところ

ろ、みんなしどろもどろになってしまったのです。当然、科学的な分野の話は非常に高度で素晴らしい話が展開されていたのですが、「心」に関する話題になると非常に曖昧なのです。

この番組を見て私は、「これでいいのだろうか」と感じたものです。一番大切な「心の世界の追求」を、なぜ一刻も早く研究しないのでしょうか。

自分探しをしたい・悟りたいという人は、いろいろな勉強を猛烈にします。長い年月、修行する人もいます。一生かけて、悟りを得ようとする人さえいます。

しかし、はたして、本当に勉強や修行で悟れるのでしょうか。

勉強の悟りというのは、知識の悟りです。修行の悟りというのは、精神の悟りです。しかし、私の言いたいのは、命そのものの悟りです。

命を悟るとは、「宇宙の法則」を悟ることです。「宇宙の法則」の悟りというのは、時間のいらぬ世界なのです。

なぜ時間がいらぬかというのと、今、悟っていない状態から悟りという状態を作り上げていくのではなく、**もうすでに悟っている自分が自分の中にいるからです。**

あなたはすでに「宇宙の法則」そのものなのです。すでに悟っているのですから、**頭脳に悟りの知識を入れる必要はないのです。**

このことを知らせるメッセージは、社会の中で起きるさまざまな現象に示されています。

たとえば、宇宙の法則を無視して経済を優先するから、バブル崩壊後、生きる目的を失った人が大勢出てきたりするのです。

もう、**頭脳で考え出したことを最優先にするのはやめましょう。**

宇宙の法則を学び、宇宙の法則を先にするのです。

POINT

「頭脳」優先から、「宇宙の法則」優先へ。

頭でわかつてても意味がない

人間は神そのものであり、愛そのものであり、完全に調和された存在である。

聖人たちは、共通してそう教えてきました。

確かにこれは真実です。

しかし、この教えをもとに、社会の中で生き切っている人が、はたしてどのくらいいるでしょうか。

たとえ悟れたとしても、長期にわたって難行苦行しなければならないでしょう。

しかし、死ぬ間際に悟ったのでは意味がありません。遅いのです。

「私はこのために生まれてきたのだ」

できるなら、一刻も早くそう悟って生き切ることです。

悟りはゴールではありません。
悟りはスタートラインなのです。

喜びに満ち溢れた「本当の自分」（第3章で詳しく述べます）で残りの人生を生き切っていくことこそ、もっとも大切なことなのです。

「人間は神であり、愛であり、光だ」ということを頭で理解しても、何にもなりません。

頭でわかった段階では、本当の意味でわかったことにはならないのです。

本当の悟りが「黄金」だとしたら、頭で理解した悟りは、しょせん「金メッキ」したニセモノにすぎません。

あなたは金メッキしたニセモノで満足しますか。

本物の黄金を手に入れたとは思いませんか。

頭だけで理解すると、「金メッキ」したニセモノを本物だと錯覚したまま、終わってしまうことになるのです。

それどころではありません。

頭だけで理解すると、一番悟りにくい人間になってしまう危険性さえあるのです。

私は今まで専門家として、多くの人たちの心の指導をさせていただきました。

その中で、悟りにくい人には特徴があるということがわかりました。

「私はもう知っている」と思い込んでいる人が悟りにくい人なのです。

石ころなら、すぐに見分けがつくから問題はありません。

精巧なニセモノが困るのです。

紛らわしいからです。

本当にわかると、どのようになるのでしょうか。

具体的な変化をあげてみます。

顔つき・言葉・態度・出会う人や友達――。

POINT

頭で悟ると「金メッキ」。
本当の悟りは「黄金」。

何もかもがガラリと変わる

実際には、悟った感じになって人生を終わらせてしまう人が多いのです。これは、現代の学校教育の弊害だと考えられます。頭だけの理解にならないよう、強調しておきます。

魂の世界も駅伝スタイルに

科学技術は、猛烈な勢いで進化しています。

エジソンが白熱電球を発明したのは、一八七九年のこと。

それからわずか百数十年で、インターネットを通して世界中の情報を瞬時に手に入れられるようになるとは、発明王エジソンでさえ想像しなかつたでしょう。

科学技術がこれほどの勢いで進化するには、理由があります。

それは、過去の科学者たちが築き上げた研究成果をもとに、さらに研究を積み重ねてきたからです。

マラソンでいえば、前走者からたすき襷を受け継いで走る駅伝スタイルなのです。

それに対して、「魂の進化」は遅々として進んでいません。

心の世界では、いまだに天動説なのです。

二千五百年前のお釈迦様、二千年前のキリストが説いた教えを、いまだに生活の中で生かせないのが現状です。

代が変わると、振り出しに戻る。

常にまた、ゼロからスタートしてきたわけです。

進化どころか、後退しているとさえいえます。

心の問題は、ますます深刻になるばかりなのです。

日本では、うつ病にかかっている人は、潜在的なものも含めれば、一千万人近くいるといわれています。

さらに、引きこもりの若者たちは百万人、家出をする少年少女も十万人を超えているのです。

自殺者は年間三万人前後で推移し、離婚も二十万組を超えています。

また、若年層の凶悪犯罪も問題になっています。

自分で自分自身をコントロールできなくなっているのです。論理的思考で何事も解決してきた近代社会のはずが、論理的に解決できない問題をますます抱える社会になってしまったのです。

日常のように飛び込んでくる忌まわしい事件を見ても明らかです。

「科学の発達」に伴い、「魂も発達」しないと、人類は滅亡の危機にさらされてしまうでしょう。

今、最も必要なのは、魂の目覚めのスピードアップです。

魂の世界も駅伝スタイルにし、実生活の中で生きるようにしなければなりません。

東京から九州まで行くのに、「蒸気機関車でよい」と、いつまでも言うていてはいけません。

特急電車ができて、新幹線ができて、飛行機ができていったように、精神世界もどんどん進化していいはずなのです。

POINT

科学の発達に伴い、魂を発達させる。

悟りの手法も、同じことがいえます。

昔の聖者たちは、悟りを開かせるためにひたすら座禅を組ませました。それが悟りを開く一番の早道だと考えていたわけです。

今でも、座禅に取り組んでいる人は大勢います。

しかし、残念ながらその手法に進歩がありません。

大昔のやり方をいまだに忠実に継承しているだけなのです。

教えるべき立場の人々が、知恵を絞ることを怠ってきたのではないかと思うくらいです。

本当は、悟りの追求にしても、時代とともに進化していかなければならないのです。

人のためか、自分のためか

「世のため人のために尽くしましょう」

「与える生き方をしましょう」

道徳的な教えとして、よく耳にする言葉です。

確かに素晴らしい考えです。

しかし、どれだけの人が、心からそう思って実行しているでしょうか。

そもそも、「世のため人のために尽くす」とは、どのようなことなのでしょう。

あなたは、「人のため」「自分のため」、どちらの道を選びますか。

いい教えだからと、額面どおりとらえて自分のことはさておき「世のため人のため」とばかりやっていると、自分の足元が疎かになってしまいます。

無理してそうしているとしたら、いつもどこかで自分の心に嘘をついている気持ちになります。

そういった自己矛盾の心が幸せや成功を遠ざけるのです。

「人の為（ため）」は、「偽^{いつわり}」になる可能性が高いのです。

奉仕の精神でしていると思っても、**心の奥では、見返りを期待している場合も多いのです。**

人から全く認められなくても、淡々と世のため人のために尽くせますか。

「私は人さまのお役に立っている。いいことをしている」と自己満足することも見返りです。

本音は、見抜かれてしまうものです。

そして、何より自分自身も心の底から喜ばません。

では「自分のため」の道を選べばよいのでしょうか。

「自分のため」を全面に出すと、エゴの強い人と言われて敬遠されてしまいます。

周りとの調和が取れなくなり、健全な社会生活が送れなくなります。いずれにしても矛盾があるのです。

灯台でたとえてみます。

灯台は遠くを照らして船を導きます。しかし、灯台の下は真っ暗です。

ちようど、「人の幸せのため」と言つて、遠くを照らしていても、自分の家庭、つまり足元はぐちゃぐちゃの状態のようなものです。

では、慌てて足元を照らせば、どうなるでしょう。

足元は明るくなりますが、今度は遠くの船を照らせなくなります。

本来の灯台の役割をはたせなくなってしまうわけです。

ちようど、「自分のため」と言つて、人のことは省みない状態です。

やがて人から「アイツは自分のことしか考えない、エゴの強いやつだ」などと言われかねません。

さて、どうしたらいいのでしょうか。

灯台そのものが光になればいいのです。

灯台自体が光り輝くのです。

そうすれば、足元も遠くの船も同時に照らすことができるわけです。

「本当の自分」に気づけば、自分自身が喜びで満たされます。

自分自身が喜びで満たされれば、心から自分のことを愛せるようになります。
す。

自分のことを愛せるようになって初めて、他人のことも心から愛せるようになるのです。

身近にいる人も、遠くにいる人も、どんな人でも心から愛せるようになる

のです。

自分自身が喜びで満たされると、情報に惑わされることもなくなりま
す。

自分のやるべきことも明確になってきます。

自分が本来もっている能力を、社会の中で十分に発揮していけるようにな
るわけです。

その結果、社会に最大限貢献することができ、周りの多くの人にも良い影
響を与えることができるのです。

本当の自分に気づくことこそが、結局、最大の社会貢献になるのです。

社会貢献をしようと意図的に活動する必要はありません。

「本当の自分」に目覚めて、その「本当の自分」で生き切ることです。

そのような生き方をすれば、あなたという存在自体が周りに良い影響を与

POINT

「人のため」でも「自分のため」でもなく、
「あなたが、ただ喜びで生きる」。

え始め、あなたのすべての行動が周りに光を与えるのです。

なぜ、宗教戦争は起きるの？

昔、太陽や星が地球の周りを回っているという考え「天動説」が常識でした。

しかし、コペルニクスやガリレオが、「太陽の周りを地球が回っているのだ」と言い出したのです。

地球から見れば、太陽や月や星は地球の周りを回っているように見えます。だから、当時の人々は天動説を信じていたわけです。

これは「個」から「全体」を見た時の見方です。自分という「個」から見れば、太陽や星が自分を中心にして回っているとしか見えない。

しかし、宇宙全体から見た時、地球が回っていて、それで周囲が動いているように見えていたのだったという事実がわかるのです。

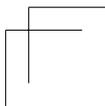
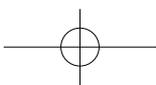
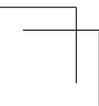
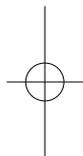
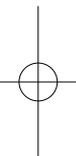
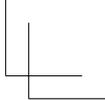
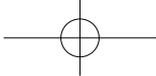
これが「全体」から見た物の見方です。

POINT

「個」から「全体」でなく、「全体」から「個」を見る。

このように「個」から「全体」を見て発想するのではなく、宇宙という「全体」から「個」を見るのです。
私たちは天体だけでなく、あらゆるところで個の発想を容認しています。今までは「個」から見て周囲と対立を起こしてきました。あたかもそれが、人間の宿命であるかのように。

たとえば、何かの宗教に凝っている人は、自分の宗教こそが素晴らしいと考えがちです。自分の観点から物を見て、他の宗教を批判するわけです。それがエスカレートすると、宗教戦争が起こるのです。



第

2

章

心における横の法則・縦の法則

「神さま」「仏さま」という言葉は、あなたにはどう響きますか。

そう聞かれたところで別に響かないし、特に関心がないというのが、平均的な日本人の反応ではないかと思えます。

あえて、突っ込んで聞けば、

「神も仏もあるものか」「宗教なんてウサン臭い」

という反応が返ってくるかもしれません。

私たちは、ともすると「神仏」に対して過剰な拒否反応を起こしたり、疑いの心で一杯になったりします。

なぜでしょうか。

原因は一つです。

私たちが、「法則」をよく理解していないからです。

「法則」とは、大宇宙に働く二種類の法則のことです。

「法則」を理解していないから、私たちは「神仏」に対して拒絶感をもって

しまうのです。

またそのため、次のような言葉に対して、矛盾を感じてしまいます。

「神は完全な調和であり、愛そのもの、光そのものです」

「あなたや私も含めて、宇宙のあらゆる存在は神仏の現れです」

多くの優れた精神世界のリーダーや宗教者の発言です。

こう聞くと、

「だったら、何でこんなに苦しまなきゃならないんだ」

「どうして、あんな悲惨な事件が起きるんだよ」

といった疑問が、当然のように頭をもたげるのです。

精神世界を熱心に勉強している人、宗教を深く信仰している人ほど、こういう疑問をもつのではないでしょうか。

神と人間を分け、神を一つの人格としてとらえる宗教を信仰している人

は、こう言うかもしれません。

「全知全能の神は、なぜ人間をこれほど苦しめるのか」

日常的に自分に降りかかる困難や悩み、そして毎日のように飛び込んでくる、目を覆いたくなるニュースを見るたびに、この矛盾は深まっていくのです。

心の世界にそれほど関心のない人でも、このような矛盾に疑問を感じているのではないでしょうか。

宗教の中には、この矛盾に答えるために、「神が悪いのではない」と神を弁護する理論を発達させてきたものもあります。

しかし、そもそも、大宇宙に働く法則さえしっかり理解していれば、必要のない理論なのです。

では、私たちが理解しなければならぬ法則とは何でしょうか。
それは、私たちの存在するこの世界には、「横の法則」と「縦の法則」という二つの法則が働いているという事実です。

この二つの法則を理解せずに混同してしまうことで、先の矛盾、疑問が生まれるのです。

「横の法則」とは、人間の心と現象との関係を支配する法則です。

「縦の法則」とは、神・仏と人間との関係を支配する法則です。

「神さまの本当の姿」

「仏さまの本当の姿」

をはつきり見るために、まずは、この二種類の法則と、その違いを明確に理解する必要があります。

それでは、解説しましょう。

あなたの心を支配する原因と結果の鎖―横の法則

「横の法則」とは、人間の心に働く法則です。

あらゆる心の働きは「横の法則」に従っています。

心の働きはさまざまです。例をあげると次のとおりです。

- ・ 出来事をどのようにとらえるか、という「認識」の働き。
- ・ こうしよう、と行動を起こす「意志」の働き。
- ・ 嬉しかったり、悲しかったり、怒ったりとといった「感情」の働き。

これらは、すべて「横の法則」どおりに動いています。

「横の法則」は因果律、いわゆる「原因と結果の法則」です。

心は、「原因と結果の法則」にしたがって動くわけです。

「ガラスのコップを床に落とすと割れる」とか、「食事を抜いたらお腹が空く」といった、一般的な因果律と全く同じです。

たとえば「悪口を言われて、ムカッとする」というのも、その一つです。「悪口」という原因が、「ムカッとする」という結果を引き起こすわけです。

つまり、あるタイプの現象（A）に引きつづいて、別のタイプの現象（B）が起こるということです。

心理学が研究しているのは、この「横の法則」です。

心理学者は、ある条件では心がどう動くのか、別の条件では心がどう動くのかということを探る、そこから法則を探っているわけです。

また、たとえば去年まで社会現象と言われ世間を騒がせていたものも、気がつけば誰にも語られなくなっているということもよくあります。

いわゆる流行り廃りという現象です。

「流行」は、「流れ行く」と書きますが、何が流れるのでしょうか。

それは、人の心です。

今、流行っているモノは、過去に流行っていたモノが「原因」となって現れた「結果」なのです。

そして、今流行っているモノは、未来に流行るモノの「原因」になります。

こうした、人の心の流れを、仏教で「無常」と言います。

心は無常の世界にあります。

無常とは、「この世のあらゆるものは、生まれては滅びるものであり、留ることがない」という意味です。

この絶えず変化しつづける無常の世界の中で、私たちは「心地良い状態」と「苦しい状態」を行き来しています。

無常の世界の中で、心の動きと実際の行動とを支配する法則、それが「横の法則」です。

さて、「横の法則」は、次の三つの法則から成り立っています。

- ① 「欲望はすべて実現する」
- ② 「感情は記憶によって決められている」
- ③ 「肉体は、自分を守ろうとする力“によって形作られている”

では、以上の「横の法則」の三法則を順に見ていきましょう。

願いは叶えられましたか？

横の法則の第一法則は、「欲望はすべて実現する」ということです。

横の法則、心の法則から言えば、あなたの欲望・願望は絶対にかなえることが可能です。

それが想念の力です。

人生は、あなたの思ったとおりになるのです。

「そんなはずはない」と反論したくなるかもしれませんが。

「世の中、思い通りにならないことばかりじゃないか」

と。でも、そう結論を急がないでください。

たとえば、「よし、こうなろう」と意気込んで目標設定する。

しかしその後、ふと力を抜いた時に、「やっぱり駄目じゃないだろうか」

「私には無理」という気持ち湧いてくる。

じつは、そのふと力を抜いた時に出てくる「マイナスの思い」が、**ものの見事に現実化しているわけです。**

あるいは、自分でも気がつかない意識の底に眠る強烈な思いが、表面的な願望を達成することを阻んでいる可能性もあります。

何はともあれ、私たちの日々の思いや、本書を読むあなたの今この瞬間の思いは、確実に現実化します。

これが横の法則の第一法則、「欲望はすべて実現する」です。

「欲望」と言っても、あなたが意識的に「欲しい」と思っていることだけが「欲望」ではありません。

心の構造については、次章で詳しく解説していきますが、意識的に欲しいと思う「欲望」は、心の領域でも、一番浅い部分での思いであり、力も弱い

のです。

じつは、あなたは、過去の体験や経験を通し、または環境の影響を受けて、意識よりも深い心の領域、無意識の部分に「自分とはこういう人間だ」という自己像を刻み込んでいます。

潜在的にあなた自身もっている自己像という先入観は、あなたをそこに留まらせようという無意識の「欲望」をもちます。

これは、無意識の領域ですのでふだんは気づきません。

しかし、あなたが、新たな領域に踏み出そうとすると、無意識にこの「欲望」が働き出します。

そして、その無意識の「欲望」が、新しい領域に踏み出すことを許してくれず、結局、今の自分という結果から抜け出せずにいるのです。

私たちの人生において、往々にして、この無意識領域の自己像という「心の種」が原因となって、知らないうちに同じパターンを繰り返しています。

自分自身が、目の前の結果を引き寄せているのです。

この「横の法則」の第一法則は、一般的に西洋から入ってきたような成功哲学や願望実現法によって利用されてきました。

それらの理論や方法では、「私は成功する」「私は大金持ちになる」というような徹底的な自己暗示や、成功イメージの視覚化によって、自分の中にプラスの思いを叩き込んで、目標を達成しようとしめます。

成功哲学・願望実現法は、「横の法則」の第一法則をじつに有効に利用した手法だと思えます。

しかし、やはりそれには限界があります。

どんなにプラスの思いを入れても、それ以上に強いマイナスの思いをもっていたら、それに打ち消されてしまうのです。

ほんの一瞬のプラス思考などでは、それまでに蓄積されているマイナス思

考に太刀打ちできないのです。

結局のところ、あらゆる出来事は、「横の法則」の第一法則である「欲望はすべて実現する」にしたがって起こります。

すべての「思い、欲望」は実現するのですが、どの「思い」が実現するかをコントロールできない限り、自分が望む結果は得られないということです。

POINT

欲望はすべて実現する。

心にいくつのスイッチをおもちですか？

「オ…オレだよ、オレ！」

あわてた声でかけてきた電話に、うっかり、

「○○くん？」などと問い直すと、

「そう、○○だよ、じつは事故っちゃってさ、お金が必要なんだ。すぐに振り込んでよ」

息子のただならぬ様子に理性を失った母親が、あわてて銀行に向かって、大金を振り込んだが最後……。

巧妙な手口で多くの被害者を出し社会問題になっている振り込め詐欺、通称「オレオレ詐欺」。

不幸にも、こんな詐欺事件に引っかかるといふ経験をした母親は、その記憶が心に刻み込まれます。

そして、息子から電話がかかるたびに、あの騙された時の無念さ、悔しい感情が湧き上がります。

いや息子ばかりか、誰からの電話でも、どんなに誠実な対応をされようと、その電話に出るといふ状況が、その嫌な感情を呼び覚まし、身構えてしまいかもれません。

横の法則の第二法則は、「感情は記憶によって決められている」ということです。

あなたがどのような記憶をもっているかによって、あなたにどのような感情が湧き起こるのかが決まります。

仏教では、前世も含めたあらゆる記憶が入っている心を、倉庫にたとえて「アラヤ識」と言います。

この心の倉庫には、あらゆる経験が記憶として蓄積されていて、個性を形

成し、すべての心の活動のよりどころになっています。

この倉庫には無数のスイッチがあります。

それぞれのスイッチを押すと、ちょうどコーラのボタンを押したらコーラが出てくる自動販売機のように商品、つまり「記憶」が飛び出してきます。

記憶が刻まれた過去の体験・経験と似た出来事がスイッチです。

あなたの心はこれと同じ仕組みで、このスイッチが押されると、あなたの中に眠るこれまでの、ありとあらゆる記憶が出てきます。

たとえば好きな人に会う、というスイッチが押されると、あなたの心はパツと明るくなり、嬉しい感情が出てきます。

嫌いな食べ物が出てきた、というスイッチが押されたら、あなたの心は大混乱し、「うわっ、まずそう！」と嫌な感情が引き出されます。

ひよんな出来事で、あなたの中の意外なスイッチが押されることもあります。

「火事場のバカ力」は、その好例でしょう。

ある出来事がきっかけとなって、あなたの心のスイッチが押される。

そして、心が一瞬にして変化する。

これは、すべて「横の法則」に従った現象です。

どんな時にどのスイッチが押され、あなたにどういう感情が出てくるのか、それはすべて決定されています。

すべてです。

ある出来事が起きた時に、あなたがどういう反応をするのか全部決まっているのです。

POINT

感情は記憶によって決められている。

今も身体に働く見えない力をご存知ですか？

横の法則の第三法則は、「肉体は、自分を守ろうとする力」によって形作られている」ということです。

この「自分を守ろうとする力」も心です。

私たち人間も含め動物には、プラスとマイナス、二種類の心があります。

プラスは「愛」、マイナスは「恐怖」です。

この二つの心があらゆる行動の原動力となっています。

たとえば、野生の動物は、子どもに対する「愛」からエサを捕獲したり住処^{すみか}を確保します。

また、天敵に襲われる「恐怖」から逃げるといった行動をとって身を守ります。

私たち人間も基本的には同じです。

私たちは自分を守り、また、自分の分身である子どもを守るためにさまざま

まな行動をするのです。

この「愛」と「恐怖」は、私たちの本能の一部です。

私たちは、本能によって自分を守る行動を半ば無意識にとることができません。

この、肉体を守る役割を担った本能は、遺伝子の「記憶」によって形作られます。

遺伝子の「記憶」の中に、生き抜くための最善の行動のプログラムが、ぎっしりと詰まっているのです。

食物を目の前にした時、本能が「食べる」という指令を出して、手にとつて食べるという行動を起こします。

その結果、エネルギーや栄養を吸収して、肉体を維持します。

こうして、本能が、生命を維持させるのに最適な指令を、その場その場で

素早く出すことによって、私たちは生きつづけることができるのです。

遺伝子は、私たちの肉体の設計図です。

そして、遺伝子の「記憶」には、目の前の対象が、自分の肉体を守るために利益になるか、それとも肉体を危険にさらすかという情報や、これからどういう行動をとれば最も健康で長生きできるかという情報が入っています。

遺伝子の「記憶」は、自分を守ろうとする力の現われそのものと言えます。

そして、この遺伝子の「記憶」をもとに、私たちの肉体は形作られ、維持されているのです。

POINT

肉体は「自分を守ろうとする力」によって決められている。

時空のしがらみから解放する絶対法則―縦の法則

「縦の法則」とは、「神の法則・仏の法則」です。
いくつか例をあげて、理解していきましょう。

ここにビールがあります。

これを飲みたいのですが、栓抜きがありません。

さあ、あなたはどうしますか？

こう問いかけますと、いろんな発想が出てきます。

栓抜きの代わりになるものを探す。

隣の家に借りに行く。

コンビニに走る。

手で何とかあける。

歯であける？（笑）

さあ、しっかりと考えてください。

飲むのをあきらめ、では駄目ですよ。飲みたいのです。

テコの原理を利用して、スプーンを使う方法や、ライターを使う方法もあるらしいですよ。聞いてみると、いろんな意見が出てくるものです。

何かいいアイデアは浮かびましたか？

まだ用意できませんか？

まあ、いいでしょう。喉も渴きましたので飲みましょう。

じつは、栓抜きはいりません。

プシューッ！

はい、「缶ビール」です。

何だ、この落ち知ってるよ、何て言わずに聞いてください。

じつは、これが、これからお話しする「縦の法則」なのです。

これが、神の法則、仏の法則とどういう関係があるのでしょうか。

あなたは、「ビールがあります」と言われ「栓抜きがありません」と聞いたとき、シュポッ！ と王冠をあけている「びんビール」が頭に浮かびませんでしたか。

私は、一言も「びん」とは言っていないのに、「ビール」と「栓抜き」という二つの言葉で、勝手に「びんビール」を想像し、そう思い込んで、信じきって、一生懸命「びんビール」をあける方法を模索していたわけです。

しかし、プシューッ！ という缶ビールをあけている事実を目にした瞬間、あなたの頭にあった「びんビール」という思い込みがパッと消えて「缶ビール」という真実に目覚めたのです。

「縦の法則」とは、私たちの頭で考える「人間の思い」という世界とは全く別の世界、「事実・真実」の世界です。

この「真実」のことを、「神」であり、「仏」とらえた法則です。

これは、私たちが自分の頭で考えることを優先する限り見えてこない法則です。

この「縦の法則」は、理解する、というよりも「発見する」ことによって私たちに對して現れてくるものです。

一本のペンを取り出して、あなたに次のような話をしたとします。

ペンは、先端を押してペン先を出すノック式のよくあるものです。「これは何ですか？ ボールペンです。よく見てください。これがボールペンであることは明白ですよね」

と聞くと、（そりゃ、ボールペンだけど、いったい何を話し出すんだらう

……)といった表情でコクツとうなずくと思います。

そう答えるあなたに、ペンを目の前に差し出し、親指でカチツと、収納されていくペン先を出します。

すると、ペン先からは、ボールペンではなく、シャープペンシルの芯が出てきます。

「いいえ、これはシャープペンシルです」

その瞬間、「なあんだ、そりゃそうだ」という反応になるでしょう。ペン先を出す寸前まで、あなたの頭の中には「ボールペン」という思いがありましたね。

それが、シャープペンシルの芯が出てきた、という事実を目にした瞬間、ボールペンという「思い」がパッと消え、シャープペンシルという「真実」が見えたわけです。

しかし、私を取り出したペンは、あなたが気づいた瞬間にシャープペンシ

ルになったわけではありません。
初めからシャープペンシルである、という真実があったのです。
ここがポイントです。

書棚に、ずっと以前から使わずに埃をかぶった英和辞典が横倒しに積んである。

あるとき、ふと調べたい英単語が出てきて書棚に走り、ふうつと埃を吹いてページをめくると、あれれ？ じつは中身は国語辞典。

数年前、誰かが英和辞典のカバーを間違えてかけたままだった。

あなたの長年の「書棚に英和辞典がある」という思いは、一瞬で「国語辞典」という「真実」にかき消される。

でも、書棚の辞典は初めから国語辞典だったのです。

新居に越したのはいいものの、隣の家には、いつもしかめっ面で庭先を掃

除している、怖そうなおじさん。

子どもの頃、瞬間湯沸し器のアダ名で恐れていた、いつも怒鳴り叱られていた裏のおじさんにそっくりだ。怖そうで挨拶に行くのも遠のいて時間が過ぎていく……。

勇気をふりしぼって挨拶に行くと……。

おじさんの顔が急にほころんだかと思うと、満面の明るい笑顔で、「こんにちは！ 何かあったらいつでも声をおかけくださいね〜」……。

あなたの「怖いおじさん」という「思い」は一瞬で消え、「明るく優しいおじさん」という「真実」がわかるのです。

でも、そのおじさんは、ずっと「優しかった」のです。

「万有引力」は、天才科学者アイザック・ニュートンによって法則として定式化される前から、宇宙に存在していました。

ニュートンが木から落ちるリンゴを見た瞬間から存在したわけではないの

です。

「縦の法則」とは、あなたが認めても認めなくても、変わらず厳然として存在しつづけるものだということです。

「縦の法則」が理解ではなく、発見によって現れるとはそういうことです。

頭の理解には時間がかかりませんが、発見は一瞬です。

もともとある真実に一瞬で気づく。

これが「縦の法則」の世界です。

では、「縦の法則」を見分ける目印は何でしょうか。

一つの目印は、**より多くの人に事実・真実として認められる**ということです。

シャープペンを見てボールペンだと言う人はまずいないでしょう。

真実は疑いようがないのです。

地球上には約二百の国があります。

当然、それぞれの国は国境によって隔てられています。

しかし、ロケットに乗って地上数百キロメートル、数千キロメートルの高さから地球を眺める。

すると、そこには、国境は存在せず、地球は一つであるという厳然たる真実がわかります。

「信念」は、ほとんどの場合疑いを含み、また常に誤りの危険を伴います。しかし、「真実」を見たとき、疑いも誤りの可能性もなくなります。

そして、この「真実」は万人が認めることができます。

もちろん、私たち人間が五感や、第六感で感じ取るものは、すべて相対的です。ですから、同じものを見ても、人によって感じ方はまちまちです。

だからといって、私たち人間が真理とは無縁の存在だとは、私は決して思いません。

私たちは、人と違う感じ方をする対象もあれば、人と同じ感じ方をする対象もあります。

たとえば、好きな食べ物人は人によって違います。一方で、腐っている食べ物が好きな人はいません。皆腐った食べ物は嫌いです。

人と同じ感じ方をする部分をどんどん発見していけば、その分真理に近づいた、ということが言えるのではないのでしょうか。

すべての人が腐った食べ物を嫌うという事実に目を向ける時、そこに生命の仕組みに関する一つの真理が浮かび上がるわけです。

万人が同じ感じ方をするものが一つあります。

それは、愛です。

愛に対する感受性はすべての人がもっています。

人間はすべて、愛を感じ取る心をもっているということ、そして愛を求め

ているということ、私は約三十年にわたって三十八万人を超える多くの人の心の指導を通して、百パーセント事実として確信しています。

ここでの愛は、私たち人間がふだん使っている、執着的な情愛ではなく、神の愛・仏の愛です。

すべての人は、神仏の愛を感じることができなのです。

なぜならば、すべての人の心の根源は「宇宙意識」「神意識」そのものだからです。

私たちは自分と同質のものしか感じ取ることはできません。

物質で構成された自分の肉体によって、物体を認識することができます。

つまり自分が「物質」だから、「物質」を認識できます。他人の感情がわかるのは、自分も同じ感情をもっているからです。

つまり自分が「心」だから、「心」を感知することができます。

では、なぜ宇宙の愛、神仏の愛を感じることができるのでしょうか。

私たちが「神や仏そのもの」だからにほかなりません。

「**私たちを含め、すべてが神や仏の現われである**」ということ、**私は、観念ではなく実体験を通して確信を深めつつづけているのです。**

「縦の法則」も、横の法則と同様に三つの法則から成り立っています。

- ① 「欲望はすでに実現している」
- ② 「感情は何にも縛られず自由自在である」
- ③ 「肉体は、すべてを愛し生かす力をもとに形作られている」

では、以上の「縦の法則」の三法則を順に見ていきましょう。

最愛の人に愛されていますか？

「縦の法則」の第一法則は「欲望はすでに実現している」です。

「横の法則」の第一法則は「欲望はすべて実現する」でした。

しかし、じつはあなたの欲望はもうすでに実現しているのです。

「欲望」とは、つまりあなたの「欲しい」という気持ちです。あなたの「欲しいもの」は何ですか。

たとえば「お金」でしょうか。だとしたら、なぜお金が欲しいのですか。

お金を欲するのは、私たちがみな「自由」を求めているからです。お金がなければ、今の資本主義の世の中では、どこにも行けず、好きなものも買えず不自由だからです。

もし、いつでもどこでも好きな場所に行けるし、どんなに高価であっても

好きなモノが手に入る、という「自由」があなたに与えられていたら、**あなたにはお金は必要ないはず**です。つまり、お金そのものが欲しいのではなく、「自由」が欲しいのです。

ではなぜ「自由」が欲しいのでしょうか？

それは、自由になった時に得られる心の状態が欲しいのです。

つまり、自由になって「喜び」や「幸せ」を得たいからです。大好きなモノを手に入れて、「喜びたい」のです。

何の制約もなく、澄み切った青空の下で、真つ青な南国の大海原を前にのんびり寝転んで「心を満たしたい」のです。

「心を満たしたい」ということは、「愛されたい」「認められたい」ということです。

「愛されたい」「認められたい」のは、愛が不足しているからです。

つまり、**あなたは「愛」を欲しているのです。愛を望んでいるので**

す。求めているのです。

「お金」は愛の代替品に過ぎないのです。

では、お金がないと「愛」は手に入らないのでしょうか。

「喜び」や「幸せ」を得たいのは、自分を愛している証拠です。

愛していないものを「喜ばせたい」とか「満たしてあげたい」とは思いませんよね。

自分を愛しているから、「喜び」や「幸せ」を自分に与えたいのです。

こう言うと、「いや、私は自分が大嫌いだ」と思うかもしれませんが。しかし、そう思う人も「生きている」という事実は否定できないはずですよ。

「生きている」ということは、自分が好きだからなのです。

また、そもそも「自分が嫌いだ」ということも、自分を愛するがゆえです。好きだから、好きになってくれないと、「嫌う」という感情が出る

のです。夫婦喧嘩も、好きだからこそ、認めてくれないと、恨んだり喧嘩したりするのであって、まったく見ず知らずの隣町のおじさんが認めてくれないからと、恨んだり喧嘩したりはしません。自分を恨んでいる人というのは、自分に関心をもち、自分を深く愛するがゆえなのです。

誰でも、自分に一番関心があるのです。自分がかわいいのです。

集合写真をもらったら、どこを最初に見ますか。

よほど、あなたの意中の人でもない限り、まずは、自分の顔を探すでしょう。

自分に関心がある、ということは、自分が好きだということなのです。自分を愛している、ということなのです。

あなたが自分を愛する心の奥には、すべてを愛する「神さま・仏さまの心」があります。

あなたの中に、**神さま・仏さまの心があるのです。**

すべてを愛する神さま・仏さまの心が、「欲望」というフィルターを通して、「自分だけを愛する心」に変わってしまったにすぎないのです。つまり、あなたが自分を愛しているということは、「縦の法則」の視点から見れば、神さま、仏さまがあなたを愛してくれているということです。

神さま・仏さまの愛は無限に広く深いものです。**あなたは、神さま・仏さまに無限に深く愛されている。**それが、「縦の法則」から見える真実なのです。

そして、自分が心から愛されているのを実感することほどの喜びや幸せはありません。それも自分が最も愛している人から愛されるということは、何にも変えがたい至上の喜びではないでしょうか。つまりあなたは、すでにあなたが求めているものを得ているということです。

精神科医のE・Mさんは、後述する、**真我**^{しんが}という自分の中にある「本当の

POINT

欲望はすでに実現している。

自分」の心に目覚めた後、こうおっしゃいました。

「これからも私は、もっともっと深い愛の中にいることを知ることでしょう。とてつもない愛に囲まれて、深く愛されていることを知って、私も愛することができます。ただ感謝でいっぱいです。今までたくさん病気をもっていました、それもほとんど良くなりました。今は、まるで天国で暮らしているみたいに心は平安です」

あなたの欲望はすでに実現されているのです。

あなたは起きてます？ 眠ってます？

縦の法則の第二法則は、「感情は何にも縛られず自由自在である」です。

横の法則の第二法則は、「感情は記憶によって決められている」でした。あなたの感情は、あなたの記憶に縛られているということなのです。

しかし、縦の法則の第二法則では、あなたの感情は自由自在なのです。これはどういうことでしょうか。

それは、「縦の法則」においては、記憶は実体のないものだからです。

じつは、記憶というものは実在しません。

私たちの記憶はいわば幻想なのです。

仏教ではこの幻想のことを「業ごう」、または「カルマ」と呼びます。行為、行動によって心に刻まれた記憶のことです。

あるいは、「仮相」ともいいます。

仮相とは、仮の姿のことで、その逆を実相といいます。つまり実際の姿、真実ということです。

わかりやすくたとえるなら、ここでいう實在しない記憶、つまり仮相というのはちようど、あなたが布団の中で睡眠中に見る夢のようなものです。

怖い夢を見ると、寝汗をかいたり、うなされたりします。

しかし、恐怖にうなされ、パツと目を覚ますと、夢だったことに気がつきません。

しかし、まだ汗でびっしょり、心臓はドキドキです。

つまり、夢という実体のないものに影響を受けているわけです。

仮相という幻想はあくまで、夢のようなものですから、私たちはそこから目覚めることが可能です。

仮相という幻想から目覚める時、私たちの感情は記憶という束縛から逃れ

ます。

これが、仏教で涅槃ねはんと呼ばれる状態、つまり悟りです。

あなたがどのような記憶を抱えていても、この状態に至るのは難しいことではありません。

たとえば、一億年前から存在する洞窟の奥深くの「暗闇」があります。そして、昨日、雨戸を締め切った部屋の「暗闇」があります。

この二つの暗闇を、一気に同時に照明で照らしたらどうなるでしょうか。

二つの闇は、光によって一瞬で消え去ります。

光は神や仏の愛、闇は記憶、業（カルマ）です。

幻想から目覚める時、どんな幻想も同じように一瞬で消えるのです。

そしてその瞬間、あなたの思い、感情は自由自在になります。

POINT

感情は何にも縛られず自由自在である。

生きる力とは、生かす力

縦の法則の第三法則は、「肉体はすべてを愛し生かす力によって形作られている」です。

横の法則の第三法則は、「肉体は自分を守ろうとする力によって形作られている」でした。

横の法則での「自分を守ろうとする力」が、縦の法則では「すべてを愛し生かす力」に変わっているわけです。

まず横の法則での「自分を守ろうとする力」を確認しましょう。

「自分を守ろうとする力」は「自分を守ろうとする愛」と言い換えることもできます。

敵を攻撃するのも、自分を守ろうとする愛があるからです。

人を蹴落としてまで高い地位を獲得しようとするのも、自分を強く愛しているからです。

人間も含めたあらゆる動物の行為は、すべて愛が原動力になっているという事です。

そして、じつはこの「自分を守ろうとする愛」の本質は、「すべてを愛し生かす力」なのです。

自分だけを守ろうとする愛は自己中心主義、エゴイズムでしょう。

しかし、エゴイズムの奥にすべてに対する愛があるのです。

POINT
肉体は、すべてを愛し生かす力をもとに形作られている。

どちらにいますか？「変わる世界」と「変わらない世界」

「横の法則」と「縦の法則」は全く独立の法則です。

両者は異質なものです。

「横の法則」が対象とするのは、心の世界です。

心の世界は、無常の世界です。

常に生成・変化する世界の中で、世界の変化の仕方を因果律の形で法則化したのが横の法則です。

これは、Aという条件ならば、Bという結果が起こるといふ形で記述されます。

いわば、横の法則は「AならばB」といふ形の「ならば」法則です。

それに対して縦の法則が対象とするのは、神や仏の世界です。

神仏の世界は、不変不動の世界です。

その不変不動の世界のあり方をそのまま記述したものです。
変化がありませんので、「つねにA」という形で記述されます。
いわば、縦の法則は「つねに」法則です。

「横の法則」は、「心がとらえる世界のあり方」を法則として記述した
もの。

「縦の法則」は、「世界の真実のあり方」を法則として記述した
ものです。

哲学の用語を使えば、「横の法則」は認識論、つまり、私たちが認識する
世界の理論。

「縦の法則」は存在論、つまり、世界そのものの理論です。

私たちの認識は、常識、共通認識として共有する部分がありますが、どこ

まで行っても相対的です。心が違えば世界の見え方は全然違うのです。

同じ自分でも、昨日の世界の見え方と、今日の世界の見え方はまるで違います。ですから、「横の法則」は、幻想の理論であり、厳密な意味での真理ではありません。

厳密な意味での真理を扱うのは、「縦の法則」です。

「縦の法則」は、神仏の視点でとらえた法則です。

では、そもそも私たち人間に、「縦の法則」をとらえることができるのかという疑問が生じると思います。

この疑問は、人間に真理を認識することは可能か、という問いと同じです。

答えはイエスであり、ノーです。

ノーだというのは、私たちの認識は、心ぬきには成り立たないものであり、心のフィルターを通す限り「縦の法則」をとらえきえることはできません。

しかし、イエスとも答えられません。

たとえば、人々が天動説を捨て地動説を採るようになったということは、真理に近づいたといえるのではないのでしょうか。

誰が見ても一目瞭然の事実にのみ目を向けていくことによって、人間は真実に近づけるはずです。

私は、「横の法則」と「縦の法則」を随時対比させながら、本稿を進めて行こうと思います。

私たちは、「横の法則」の世界を生きています。

私たちが見たり感じたりするものは、すべて相対的なものです。

相対がなければ、時間も空間もなく、何も認識することも感じることもできません。

神仏そのものには相対がありません。

「縦の法則」は、絶対の世界です。

ですから、絶対であるところの「縦の法則」を、「横の法則」と対比できるものではありません。

しかし、真理をより明確に表現するために、私はあえて対比させていこうと思います。

「絶対」と「相対」を相対することで、「絶対」が明確にわかるわけです。

私たちの心は絶対ではないがゆえに、この世界の中でさまざまな体験をし、さまざまな感覚を味わうことができます。

料理も旨いものとマズイものが存在するから、旨さを認識できます。

苦しいことを経験するからこそ、本当の喜びも味わえるのです。

病気を経験してこそ、健康の有難味がわかります。

光が、自分が光だと知るためには、闇の中にあつて初めて気づけます。

白色が、自らを白色だと認識するには、黒色の中にあつてその事実をはっきり知ることができます。

ですから、私たちが「相対の世界」にいるからこそ、私たちは「絶対の世界」「真理の世界」の素晴らしさを認識することができます。

もし、絶対だけで相対が存在しなければ、神仏の素晴らしささえも私たちは認識できないのです。

「横の法則」と「縦の法則」を、はっきりと区別できるようになれば、真理の世界、つまり神さま・仏さまの本当の姿は明らかになるはずです。

私たちの世界は「横の法則」と「縦の法則」に同時に従っています。

「業・カルマ」と「神仏」が「併存」するのです。（業・カルマは実在ではありませんが）

ひとたび、「横の法則」の視点から、「縦の法則」の視点へと移っていく時、世界の見え方はまるで違ってきます。

この驚きと喜びは、何にも替えがたいものです。
あなたは、それを本書の中で何度も体験することになると思います。

たとえば、久々に帰郷した時のことです。

私の故郷は、北海道の美唄市びばいです。美唄は炭鉱の街でした。

私が子どもの頃は、街全体が炭鉱のお陰で大変活気があり、栄えていました。しかし、それから数十年たち今回、久々の帰郷で私が暮らしていた家の付近に行ってみました。

すると、炭鉱の街として栄えていた当時に比べると、民家が驚くほど激減し、大変さびしい状態でした。かつて私が暮らした家もなく、あたり一帯は、一面青々とした草木が生い茂っていました。

しかし、「これは衰退などではない」と私は思いました。

「横の法則」、つまり私たちの思いという人間中心に考えれば、確かに衰退なのかもしれません。

しかし、青々とした野草や木、虫や花はむしろ生き生きとして生命力に満ち溢れ、大自然本来の姿として大変繁栄しているのです。

全体的な視点、つまり、地球の大自然の中に住まわせていただいているという「縦の法則」の視点、真実の視点で眺めれば、じつに喜ばしい状況です。

これは、「横の法則」の視点から「縦の法則」の視点へと移るといふことの一例です。

「神さま・仏さまの本当の姿を見る」のが、本書の目的です。

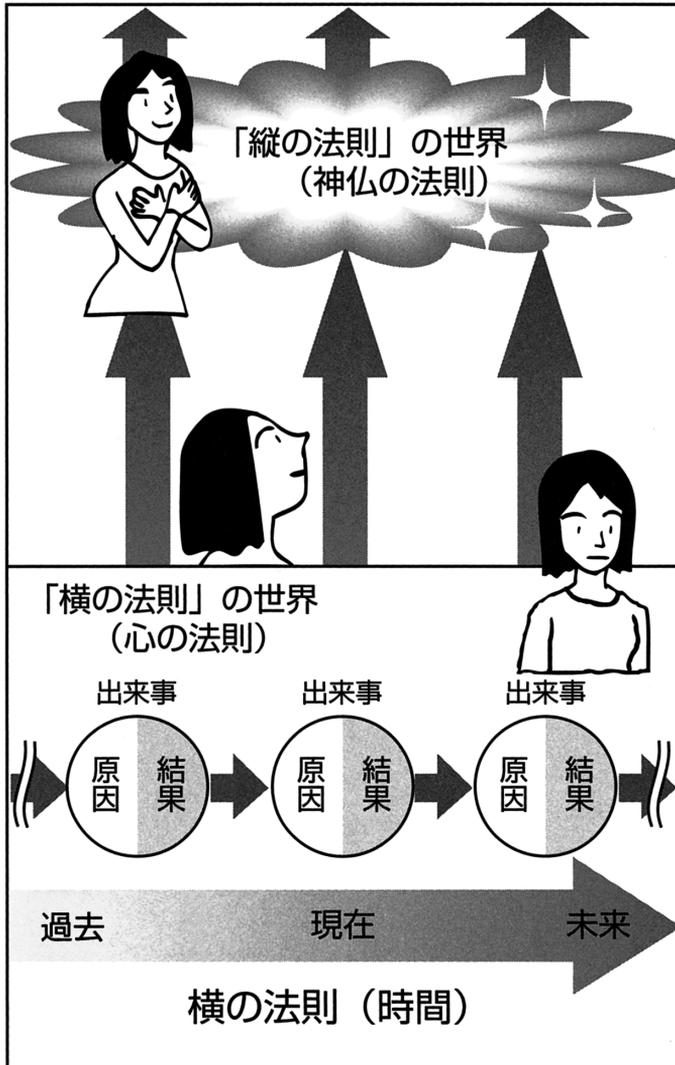
そして、「神さま・仏さまの本当の姿を見る」といふことは、「横の法則の視点から縦の法則の視点」へ移るといふことに他なりません。

「縦の法則の視点、つまり「神さま・仏さまの視点」から世界を見る時、すべてが、神さま・仏さまそのものだということがわかるのです。

POINT

「横の法則」は「心がとらえる世界の法則」、
「縦の法則」は「真実の世界の法則」。

「縦の法則」と「横の法則」



「縦の法則」は元に戻る力

あなたの利き手の親指と人差し指で、振り子をもっているところを想像してください。その振り子の錘を、もう一方の手でつかみ、利き手のヒモをつまんでいる高さまでもち上げています。

この状態の時、振り子には二つの力が同時に働いています。振り子の錘を手でもち上げようとする力が働いていて、錘はそこに留まっています。

しかし、万有引力によって、下に落ちようという力も働いています。もち上げようとする力と、落ちようとする力。この二つの力が同時に働いているのです。

「横の法則」「縦の法則」は、この例から説明することもできます。

この、錘を手でもち上げた力にあたるものが、「横の法則」。

つまり、人間の心の法則です。これは、人間の想念の力とも言えます。そして、^{おもひ}錘が下に落ちようとする力にあたるものが、「縦の法則」。つまり神・仏の法則、宇宙の法則です。

この振り子をもち上げている状態の場合、この二つの力のうち、どちらの力が勝っているでしょうか？

そうです、横の法則、つまり人間の心、想念が勝っているのです。

これと同じように、私たちの世界には「横の法則」と「縦の法則」とが同時に働いています。

そして、私たちの意思で**神の法則に逆らう自由もあるのです。**

しかし、横の法則で、その錘^{おもひ}をもち上げようが、手放そうが、もともと、下に落ちようとする力、つまり**縦の法則は、初めから働いています。**

「縦の法則」は、このように元に戻ろうとする力として、常に働いているのです。「縦の法則」は調和です。元々ある完璧な大調和の法則です。すべての

不調和も問題も、最善の調和への自動的に解決してくれる世界なのです。

実際に、私たちは縦の法則に逆らって、振り子をもち上げるようなことを日常生活の中でしています。

振り子が元の方向に戻ろうとする力が、縦の法則、神・仏の法則です。

この力に沿うか逆らうかは、私たちの自由意志に関わっているのです。

「何でこんな目に合うんだ、神も仏もあるものか！」

そう言いたくなることは、誰にでもあることです。

しかし、神さまが見捨てたわけでも、仏さまがしたことでもなく、自分が自分の自由意志で苦難をつかみながら、何でこうなるんだ、と言っている場合があるのです。

しかし、逆らって、ずっとつかんでいると、やがて疲れてきて、不調和を生んだり、問題や悩みに発展したりします。

病気なども、縦の法則に沿っていないことを示すメッセージとして、現れ

る場合があります。

たとえば、病気にかった時、「自分は病気なんだ」と、自分の心で病気をつかんでしまうと、つかんだとおり、病状が継続し、さらにその心が強い思い込みとなって病気をつかんでいると、悪化してしまうことがあります。

病は気からの原理です。しかし、「病気だ」という思いをもとが、手放そうが、元の健康な状態に戻ろう、戻ろうという、縦の法則、「神・仏の法則」は常に働いています。

「もともと病気なんてないんだ」と、病気だという思いを手放した時、元に戻ろうという力が働き出し、元の健康な状態に戻っていくのです。

POINT

横の法則は、人間の想念の力。

縦の法則は、元の調和に戻ろうとする力。

沿うも逆らうも、自由意志に任されている。

本当に自分の意思で読んでいますか？

私たちは、想い（心）によって創造された世界に住んでいます。

つまり、必ず誰かの心に描いた想いが形となって現れているのです。

今あなたが読んでいる、この紙でできている本も、私がこの本を書こうという想いがなければこうして物質としてあなたの手に渡っていないのです。

しかし、本当に私たち人間が創造したのでしょうか。

あなたに質問します。空を飛ぶ飛行機は誰が作りましたか。

人間？ 本当に人間ですか。

では、その素材のアルミニウムを作ったのは誰ですか。ガラスは誰がつくりましたか。燃料のガソリンも人間が作ったのですか……。

確かに人間が飛行機を設計して組み立てたのでしょうか。

では、その人間を作ったのは誰ですか？ 脳みそで考えたと言いますが、その脳みそを作ったのは誰でしょうか。

別の角度で質問しましょう。

今日、ご飯を食べた時、誰の意思で食べましたか。

あまり難しく考えないでください。そうです、あなたの意思ですね。

なぜ、あなたは食べようとしたのでしょうか。それは、お腹が空くからです。では、何でお腹が空くのですか。

あなたの胃や腸が、食べたものを消化吸収したからです。

「これを食べよう」と思って、ご飯を口に入れたのはあなたの意思です。

しかしその先は、食道を通って、胃に入って、消化して、小腸大腸を通して栄養分を吸収して、後は前と後ろに分けて全部排出してくれる。

この作業は、**いったい誰がやってくれているのでしょうか。**

途中からあなたの意思がなくなってしまうっていませんか。

あなたは、ここまで本書を読んできました。

今読んでいるのは、誰の意思で読んでいますか。

当然、あなたの意思です。たとえ誰かに薦められて本書を手にしたとしても、読むのは自分の意思です。

でも、**本当にあなたの意思で読んでいるのでしょうか。**

同じ本があっても、読む人もいれば、読まない人もいます。ということ
は、読んでいる、というのとは、読ませる何かがあったのです。

その何かが、過去の人間関係のトラブルが原因で悩み、心のことに興味を
もったからだとなります。

しかし、同じ人間関係のトラブルにあっても、悩まない人もいます。

では、なぜ悩んだのか。その原因が、幼少時の親の育てられ方に起因した
とします。ということは、その親でなければ、この本を読んでいなかったか
もしれません。しかし、そういう育て方をするしかなかった親にも、その影
響を与えた親がいます。そのまた親がいて……。

こうたどっていくと、**あなたの意思は、途中で消えてしまいます。**

つまり、飛行機を作ったのも、食べ物の消化吸収も、私たちの意思と思っていたものは、すべて途中からであって、人間が一から創造したものはないのです。

この心を二つに分けて理解する必要があります。

神・仏の心、創造を「**第一念**」と言います。これが「縦の法則」です。

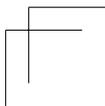
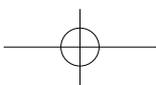
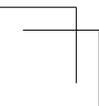
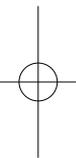
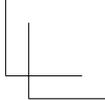
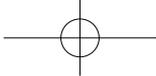
人間の想念、創造を「**第二念**」と言います。これが「横の法則」です。

すべては、第一念である、神・仏の意思から始まったものなのです。人間は、その法則の中に生かされているのです。人間が作ったと思っていたものは、「**第一念**」の中で途中から組み立てたり加工したに過ぎません。

ということは、**神・仏の法則である「第一念」、つまり「縦の法則」に沿うことが大前提になる**ということなのです。

POINT

すべての創造は神・仏の法則「第一念」から始まっている。



第

3

章

本当の自分（宇宙意識・真我^{しんが}）

前章では、「横の法則」と「縦の法則」についてお話ししました。

「横の法則」とは心の法則、「縦の法則」とは神の法則・仏の法則でした。

そして、私たちが「横の法則」の視点から、「縦の法則」の視点へと移ることによって、「神さま・仏さまの本当の姿」を見ることができると述べました。

また、「縦の法則」の視点へ移るとは、私たちが「神さま・仏さまの目」で世界を眺めるということです。

しかし、本当にそのようなことが可能なのでしょうか。

結論から言うと、可能なのです。

なぜなら、私たちの心の一番深いところに「本当の自分（しんが真我）」というものが存在するからです。

「本当の自分（しんが真我）」とは、あなたの中にある「神さま・仏さま」その

第3章 本当の自分（宇宙意識・真我）

ものです。

あなたの中の「本当の自分（＝真我）」が「神さま・仏さま」だからこそ、あなたは「神さま・仏さま」の目で世界を見ることができなのです。

では、その「本当の自分（＝真我）」とはどのようなものなのでしょうか。順を追ってわかりやすく解説いたしましょう。

心の三層構造

前章では、次のような説明をしました。

- ・「横の法則」とは「心の法則」。
- ・「心」の世界は「無常」の世界。
- ・「心」の世界は「原因」と「結果」が連鎖する世界。

私たちの「心」と目の前の「現象」との間には、「原因」と「結果」の関係があります。「心」という「原因」が、さまざまな「現象」という「結果」を引き起こしているということです。

これは法則ですから、例外はありません。

たとえば、運の良し悪しも「心」で決まります。

「心」という「原因」の種が、運が良い、悪いという「結果」の花を咲かせるのです。

第3章 本当の自分（宇宙意識・真我）

では、あらゆる「現象」の「原因」である「心」は、どういう構造になっているのでしょうか。

人間の心は、その役割の違いから、三つの部分に分けて説明することができます。

これを、「心の三層構造」として解説しましょう。

心の第一層「観念」

前章でも述べましたが、「心」には、大きく分けてプラスとマイナスがあります。プラスは「愛」。マイナスは「恐怖」です。

これはあらゆる生物の行動の原動力として、すでにお話しました。

しかし、こと人間に限っては、「考える」という一種独特の思考をもっていますので、もう少し複雑です。

プラスは、「明るく」「前向きに」「積極的に」「夢をもって」「目標をもって」「プラス思考で」「愛と感謝の気持ちで」「素直な心で」「勇気をもって」と言った心です。

マイナスは、「暗く」「後ろ向きに」「人を恨んで憎んで妬んで」「傲慢で」「偏屈で」「マイナス思考で」と言った「心」。

どちらの「心」が「原因」になれば、「運がいい」という「結果」に結び

つくかは、あえて問うまでもないことです。

当然「プラスの心」が原因になれば良い結果に結びつく、ということは誰でも理解しています。

仮に刑務所で牢獄暮らしという結果を出した人に質問しても、間違えないでしょう。

しかし、これは「頭ではわかっている」ということなのです。

「頭でわかる」という心の領域は、「観念」と言って、心の領域でも一番浅い部分に当たります。

では、なぜそのことを理解していても、牢獄入りという結果を出してしまう人もいるのでしょうか。

結局、頭で、「プラス思考が大事」とか「愛と感謝の心で生きる」とか「何があってもありがとうの心で」ということを理解しても、いざとなったら「マイナス思考」が頭をもたげてしまう。

「感謝しなさい」と言われても、苦手なあの人を目の前にすると、どうしてもそういう気持ちになれない。

つまり、頭の理解とは反対の思いが、どこからともなく湧き上がってきてしまうのです。

「そう思おう」とするのは、「そう思っていない」からです。

プラスに思おうとする前に、すでにマイナスに思っていた心がどこかにあったということなのです。

そして、厄介なことに、「すでに思っていた心」の方が圧倒的な力をもっています。

知識として頭にプラス思考を入れたところで、湧き上がってくるマイナス思考を抑えることはできません。

では、その心は、いったいどこからやってくるのでしょうか。

POINT

頭の理解（観念）は、心の一番浅いところにある。

心の第二層「業・カルマ」

知識とは裏腹に、湧き上がるマイナスの心があります。湧き上がることとは、私たち人間のどこかに刻み込まれているということなのです。

では、人間は、いったい何でできているのでしょうか。

肉体一つ見ても、皮膚、筋肉、臓器、骨やそれらを構成する細胞。血液、遺伝子、DNA、原子、素粒子のレベルから、波動のレベルまで、あらゆる角度で言い表せますが、こうした物理的な観点では心は見えてきません。

私は、**人間は、記憶でできている**ととらえています。「えっ、記憶？」と、思われるかも知れません。人間は記憶そのものととらえると、心も含めて何一つ矛盾なく説明できます。肉体も含めあなたは記憶の塊なのです。

私たちは、「オギャア」と生まれた時、お父さん・お母さんに顔や性格が

似ていたり、同じような病気になる可能性を秘めています。つまり、先祖からの記憶を、遺伝子によって受け継いでいるのです。

あなたの顔は、お父さん、お母さんの記憶、そして、おじいちゃん、おばあちゃん、ご先祖様の記憶そのものなのです。

そして、魂の世界では前世の記憶からも明らかに影響を受けています。

このように、私たちは、「遺伝子」の記憶と「前世」の記憶が折り重なって生まれてくるのです。

生まれてからは、親からの育てられ方の影響を受けます。また兄弟姉妹・学校の先生・友達・社会に出てからの上司・部下などの多くの出会いがあります。こうした人間関係を通して、さまざまな体験・経験をします。

嬉しかったこと、悲しかったこと、楽しかったこと、騙されたこと、褒められたこと、辛かったこと、痛かったこと……。

あなたには、さまざまな記憶が細胞にびっしりと刻み込まれています。忘れていても、じつは潜在意識にしっかりと記憶されているのです。

前述しましたが、これらの記憶のことを、仏教では、行為によって心に刻まれた過去の記憶、「業・カルマ」と言います。「アラヤ識」とも言います。「細胞の記憶」「遺伝子の記憶」と言ってもいいでしょう。

私たちは、**過去の記憶を何一つとして忘れてはいない**のですが、ふだんはそのうちのほんのわずかしか、頭では認識していません。

しかし、記憶が刻み込まれた時と似たような状況が、外界（目に見える世界）に現れると、それが前章で述べた心のスイッチを入れます。

すると、当時の記憶が感情とともに呼び覚まされるのです。

頭での理解よりも、結果に大きな影響を及ぼす「隠れた心」が、こうした過去の”記憶”から湧き上がってきていたのです。

マイナスの記憶が多ければ、いくら良い教えを聞いて頭で理解したとしても、簡単には救われません。

何かあるたびに、心のスイッチが入って、マイナスの記憶が引き出され、マイナスの感情に苛まれることになります。

この状態を避けるために、私たちが往々にしてやってしまうのが、このマイナスの思いにフタをするように、プラスの情報をインプットしていくのです。

自己暗示やイメージトレーニングを何度も繰り返し行うのもこの行為です。

しかし、インプットされたプラスの情報は、先に説明したように、頭には入っても、「業・カルマ」の領域にはほとんど影響を与えません。

影響を与えないどころか、インプットはむしろ逆効果になる可能性が高いのです。

それは、インプットされた「良い教え」をマイナスの心で使ってしまう、その「良い教え」で、違う考えの人を裁き出すのです。

また逆に、その教え通りに実行できていない自分を、責めだす場合もあります。

「観念」は道具と同じですから、その道具を、どういう心で使うかが問題なのです。

ですからその心、つまり「業・カルマ」に手をつけなければなりません。

幼児虐待する親の多くは、かつて本人も虐待されて育った人です。幼い頃のことがフラッシュバックしてしまうのです。心理学的には、トラウマ（精神的外傷）といえます。いくら子どもを愛そうと頭で思ってもできません。

また、できない自分を責め、さらに苦しむのです。

この「業・カルマ」を浄化しなければ、問題を根本解決したことはなりません。

この「業・カルマ」を浄化する手法はさまざまです。

二、五〇〇年前の釈迦や、二、〇〇〇年前のキリストも、瞑想や座禅をして「業・カルマ」を浄化することを実践し、説いてきました。

また、現在の人間関係のパターンを両親からの育てられ方が原因であると

して、自分の過去を内観して、マイナスの記憶を両親への感謝などをきっかけにプラスに転じる手法。

幼少時の記憶を呼び覚まして癒す手法。

過去世の記憶に原因を見つける手法。

心理カウンセリング、催眠療法やさまざまなセラピー、ヒーリングで過去のマイナスの記憶を、薄皮を剥ぐように一枚一枚取っていく手法。

挙げたらきりがありません。

確かに、こうしたさまざまな手法によって、癒される体験も多々あると聞いています。

忘れかけていた両親への感謝から過去のトラウマをプラスに転じ、気分が良くなる、心が洗練される。

しかし、時間が経つと、また別のマイナスに支配され、その場限りの一時的な成果で終わる場合が多いのが現状です。

この「原因」と「結果」の連鎖をたぐっていくと、たとえ両親に原因があつても、今度はその両親を育てた原因の両親がいて、そのまた両親がいて……など見ていくと、それこそ、人類創世まで見ていかなくはなりません。

自分の人生のさまざまな記憶を見ていくだけでも大変なのに、そのようなことをしていたら、それだけで一生が終わってしまいます。

過去の記憶は、それだけに留まらず、前世からの記憶もあるわけですから、そう考えると、底なし沼のようなものです。

事実、さまざまなセミナーや宗教的実践、瞑想をしたとしても、浄化できない方がほとんどです。

真つ暗闇の広い部屋を懐中電灯で照らすようなものです。これでは、部分的に照らすことはできても、全体を照らすことはできません。

では、どうすればいいでしょう。

スイッチ一つで天井の電気をつけて、一瞬で暗闇を消す方法はないのでしょうか。
それを次に見ていきましょう。

POINT

人間は記憶の塊。
記憶Ⅱ「過去の記憶」「細胞の記憶」「遺伝子の記憶」。

心の第三層「真我」

ここまで、「心」の一番浅い部分、表面の部分として、頭での理解をする「観念」。その奥にある、過去の記憶、「業・カルマ」を説明してきました。そして、私たちの「心」の最も深い部分には、この世のすべての真実をとらえることのできる心が存在しています。

この心を、私は**真（まこと）の我（われ）**と書いて「**真我**」と言っています。

「真我」は、「内なる神の心」「内なる仏の心」「宇宙意識」「神意識」「実相」「愛そのものの心」と言ってもいい心です。

無限の愛に溢れた大調和の心です。歓喜にあふれた、喜びの心です。

この「真我」こそ、あなたの本当の姿「本当の自分」なのです。

「真我」は完全な心です。「真我」は、完璧な心です。

あなたが今どれだけ悩んでいても、本当のあなたは何一つ悩んでいません。
あなたが今どれだけ迷っていても、本当のあなたは一切迷っていません。
あなたが今、どれだけ暗い心に襲われていようとも、本当のあなたは、闇はおろか、常に輝きつづけている光そのものなのです。
これが事実です。

POINT

「本当の自分」|| 「真我^{しんが}」「内なる神・仏の心」
「宇宙意識」「光そのものの心」。

心の第三層「真我」

心の闇である業やカルマを消さない限り、真我に目覚めることはできない。真我に目覚めれば愛の心しか浮かばなくなる。

観念（頭で考える）
（知識・情報、考え方） プラス思考 マイナス思考

「建て前」
（会社でベコベコ）

+

-

業・カルマ

+

-

+

-

+

遺伝子の記憶

+

+

「心の貯水タンク」

-

-

-



「本音」
（焼き鳥屋でのグチ）

+

+

+

-

-

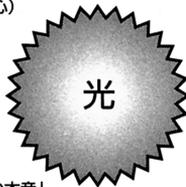
真我（神の心）

宇宙意識

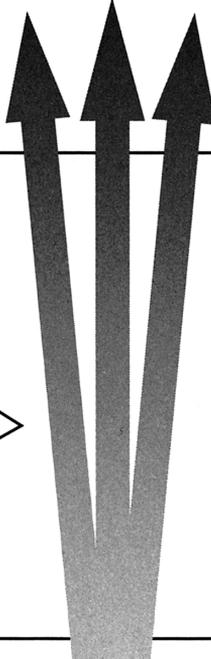
愛そのもの

光

「本音の奥の本音」
（私を愛して欲しい）



真我を開くと業が消えて光に変わる
そして愛の心しか浮かばなくなる



真我しんがの覚醒

あなたが、一生懸命頭に入れようとしている、プラス思考も、愛も感謝も、素晴らしい教えの一切は、すでにあなたの内なる「真我」に元々在るのです。

元々あなたの中に在るのだから、あなたはそれを学んで頭に入れる必要は無いです。

では、どうすればいいのか。

在るのだから、それを引き出すのです。

ちようど、あなたが立っている地面の深いところに、黄金の温泉があるとします。

今は地表に埋もれて表に出てきていません。

しかし、在るのが事実なら、あとは地面をツルハシで掘削するだけです。

それと同じように、あなたの心の奥にある「黄金の心」、真我を掘削、ボーリングしていくのです。

この心を掘り下げるための「心のツルハシ」と、掘削していくための画期的な手法を私は発見したのですが、詳しくは後述します。

こうして心を掘り下げていくと、温泉を掘り当てる時のように、温泉の熱が伝わってきたり、硫黄の匂いがしてくるようになり、あなたの心にも、熱く湧き上がるような何かが感じ出してきた、もうすぐだ、という感じになります。

そして、いよいよ最後のひと掘り、ツルハシをトンと突いたら、温泉が一気に湧き上がるように、一瞬でああなたの全身の細胞に、真我の愛と、感謝と、喜びの心が満ち満ち溢れてきます。

これは、言葉の表現をはるかに超えた体験ですので、とても文面に表すの

には限界があります。

先の「業・カルマ」は、闇のようなものです。

「真我」は、光そのものといってもいい。

ですから、真我に目覚めれば、その光で業・カルマが一瞬で消せるのです。

まさに「縦の法則」で述べた、人間の思いという幻想が光という真実、実在によって一瞬で消え去る瞬間です。

私たちが、知識で愛や感謝を頭にインプットするのは、マイナスの心が湧き上がるのに対して、フタをするようなものです。

マイナスが出るから、プラスを入れようとしているのです。

しかし、あなたの心の奥底から、愛と感謝と喜びという、言ってみればプラスそのものの心しか湧き上がってこなくなったら、あなたはもうプラスを入れる必要がなくなるのです。

その素晴らしいプラスそのものの本当の心が、直接湧き上がってくるようになります。

そして、その心は、そのまま心からの言葉となり、愛に満ち溢れた顔つきになり、感謝に満ち溢れた行動になり、まさにその素晴らしい真我の心が「原因」となって、現象という「結果」に素晴らしい運命を映し出すのです。

これが、真我の覚醒です。

真我に目覚めだすと、「個」が「全体」と融合します。

完全に大調和されている姿です。

自分と、自分の周りにいる人たちが融合されていく。

自分と日本が融合されていく。

自分と世界が融合されていく。

自分と地球が融合されていく。

そして、自分と宇宙が融合されていきます。

しかし、それを頭で理解しようとしても無理です。

頭でいくら考えても、そのような気持ちになることは永遠に不可能です。

真我に目覚めれば、それを体感できるのです。

なぜなら、真我は内なる心の中にある宇宙だからです。

たとえば、風船を膨らませた時、外の空気と風船の中に入っている空気とは分離しています。

風船は、あなたの「観念」や「業・カルマ」です。

その風船がパンツと割れたら、一瞬にして全体の空気と融合します。

真我は宇宙です。

ですから、真我を開いたら、一瞬で「あなた」と「宇宙」が一つになれる

POINT

真我の覚醒Ⅱ「全体」と「個」の融合。

そ、すべての人間が内なる真我に覚醒していくことだったのです。 釈迦を始め、過去の悟りを開いた覚者が、もつとも実現したかったことこ

世界があります。

ダイヤモンドとイミテーション

あなたにプレゼントがあります。

あなたの目の前に30センチ四方のトレイを差し出しました。

その中には、ダイヤモンドが数十個散らばって入っています。

一つ1カラットはあります。

もちろん、本物です。

ちなみに、同じトレイの中に、ダイヤモンドと同じくらいの大さきの石ころも数十個入っています。

失礼しました。言い忘れました。

先ほどのダイヤモンドは本物なのですが、じつは、半分はイミテーションです。つまり、見た目は本物そっくりのおもちゃです。

さあ、どれを選んで結構です。

プレゼントは、このトレイの中から、一つだけです。
どうぞおもち帰りください。

この時、このトレイの中に入っている三種類。あなたにとって一番邪魔なものは何ですか？ 石ころは、見てすぐにダイヤモンドじゃないことはわかりますよね。

邪魔になるのは、間違いなく「イミテーション」です。

一見、本物に見え、見分けるのが厄介だからです。

この話は、先述した「心の三層構造」に対応しているのです。

「本物のダイヤモンド」は、もちろん「真我^{しんが}」です。

そして、「石ころ」は「業^{ごう}・カルマ」です。

「業・カルマ」の中には、恨み、憎しみなんていう心もあります。

愛そのものの心ではないことは、明白ですよね。

そして、「イミテーションのダイヤモンド」が「観念」です。

「頭」、つまり「観念」で学んだ真我は、言葉にしたら本物そっくりです。

そして、真我は愛そのものです。

しかし、「真我は愛そのもの」です、と頭で学んだ言葉は見分けがつきません。

愛も感謝も良い教えも、知識として学ぶのはすべて、「本物」ではなく「イミテーション」です。

また、私が「信じないでください・真実を見てください」というのはこのことです。

あなたが、下手に信じてしまったら、あなたは「イミテーション」をもち帰ってしまうかもしれません。

真実を知りたかったら、むしろ疑ったほうが良いのです。

鑑定士を呼んできたり、打ったり叩いたりして近寄ってじっくり見てみ

る。疑って疑って疑いぬいた先に、真実が浮き彫りになるのです。

「万人を愛しなさい」

と言ったような宗教の教義も、その教義がどんなに素晴らしいものであっても、それを知識として学んでいる段階では、イミテーションなのです。

教義を学び、懸命に人を愛そうと思っても、どうしても愛せない思い、憎んでしまう本音がいつまでも消えず残っているかもしれません。

その本音が、前述した過去の記憶「業・カルマ」です。

私は今まで、まさに「観念」というイミテーションを本物だと思い込んでいる方に数多く会ってきました。

こんな方もいました。

その方は、三十年にわたって自分探しの旅をしてきたそうです。

その間、四万冊以上の本を読み、数え切れないほどの講演会に出席し、五

千本以上の研修テープを聞き、あらゆる宗教、あらゆるセミナーを受けたという事です。

私が真我の話をすると、「あっそれは知っています」「それも良くわかっていきます」と返答するのです。

しかし、それはすべて本を読んだり、人から聞いたりして「頭」で学んだことでした。

本人が本当に心から体感して理解しているようには思えませんでした。つまり「観念」だったわけです。

ここに「観念」というものの怖さがあります。

素晴らしい考えや教義を学べば学ぶほど、「観念」は強化され、固定化されます。

そして、学べば学ぶほど、それがイミテーションにすぎないことに気づき

にくくなります。

なぜなら、言葉上はどう聞いても素晴らしい考えだからです。

むしろ、「この考え方の何が悪いんだ」と反論がきそうなくらい、教えそのものは素晴らしいことを言っているのです。

だから、「観念」にしがみついたまま、一生を終えてしまう方も少なくありません。

ちなみにその方は、その後、先に紹介した手法で心を掘り下げ、見事に、頭で理解することのできない宇宙の法則、「真我」を体感しました。

頭で学び、人を愛そう、人に感謝しようとするのは、本物の愛でも感謝でもありません。

「愛そう」とか、「感謝しよう」とするのは、愛していない、感謝していないから、そうしようとする必要があるのです。

真我を体感したら、「愛そう」などと思わなくても、元々愛している自分

の真実、感謝そのものの自分の真実に目覚めます。

現代科学などはるかに及ばない「宇宙の神秘」「生命の神秘」に目を向けたら、人間の頭脳では理解できないことで満ちていることは明白な事実です。

人間の頭脳的能力を過信するのは危険です。

「自分の魂で感じ取る」、「自分の命でわかる」ということは、「頭でわかる」こととは、次元が違うことです。

「観念」は、「真我」とは全く異なるものなのです。

答えは自分の中に全部ある。

ただ、引き出すだけでいいのです。

POINT

頭でわかる「知識」「観念は」、
イミテーション（ニセモノ）である。

「聖書」も「仏典」もあなたの中にある

「聖書」や「仏典」を初めとするさまざまな宗教の教義を表した書物は、それぞれの宗教における真理の書として、広く世に親しまれています。

まさに、その内容は宇宙の真理を表現した書物といえるでしょう。

しかし、「聖書」も「仏典」も、あくまでも真我を体現した覚者の教えを執筆者や編集者が自分なりに解釈を加えた上で文章化したり、編集したりしたものです。

ですから、どうしても覚者の教えを伝えるものとして限界があります。

たとえば、キリスト教では、創造主がいて、創造主に造られたものがあるという二元論が前提になっています。

しかし、神と、私たち人間を含む被造物とを分けるといふ考え方は、真我から見た時には正確な表現とは必ずしも言えないのです。

犬の子は犬。猫の子は猫なのですから、神の子は神です。
ですから、私たちも神そのものなのです。

また、「聖書」「仏典」に書かれている言葉を頭で理解することと、真我に目覚めることは全く別のことだという認識は必要です。

人生というのは、この先一瞬一瞬、何が起きるかわかりません。

ですから、何が起きてても、その瞬間、瞬間に何も見ないでパツパツと正確な判断ができるようになることが大切です。

「聖書」や「仏典」にその答えを求めることもできないわけではありません。
しかし、さまざまな限界があります。

たとえば、いつも持ち歩いて調べるわけにはいかないし、時間がかかると
いう物理的制約と、内容自体が時代背景、社会状況、地域性を反映している
という文化的制約や、執筆者、編集者が介在することによる解釈上の問題が

あります。

では、どこに正しい判断をするための答があるのでしょうか。

自分の中に全部の答えがあります。

私たち人間の六十兆の細胞を精巧に動かしている完全な心が、すでに私たちの中にはあるのです。

心臓を休まず動かし、毛細血管の隅々にまで血液を送りつづけている宇宙の心が、私たちの中には元々^あ在るのです。

完璧な、宇宙そのものの働きと同じものが、あなたの中に元々在るので
す。

また、一部の教義や個人的な信念に、あまりにこだわりつづけることには
注意が必要です。

ある教義・信念を「これがすべてだ」と思い込んでいる人は、それを絶対化し、どうしても型にばかりこだわってしまいます。

すると真実が見えなくなります。

本来は、お釈迦様もキリストも真我を開くことを教えたかったのです。

次の点は何度繰り返し強調しても、強調し足りないでしょう。

真我とは特定の教えではありません。

真我とは、あなたに内在する、完璧な宇宙の心、神そのものの心なのです。

あなたの真実の姿のことです。

真我こそが本当の「聖書」なのです。真我こそが本物の「仏典」なのです。

POINT

**本物は書物の中にあるのではなく、
あなた自身の中にある。**

すべては一つ

真我に目覚めると、一瞬ですべての視点から物事を見ることが出来ます。

完全なる真実を見ることが出来るのです。

神の目は、私たちの感覚器官などを超越した真実の目だからです。

神の目で見れば、宇宙のすべてが一つの命、一つの法則でできているという真実に気がつきます。

地球の自転リズム、海の満潮干潮のリズム、人間の心臓の鼓動、すべて一つのリズムで動いています。

中国の荘子は、宇宙にあるすべてのものは一つであるといいました。草や木、石も含めてすべて一つです。

アポロの乗組員だったラッセル・シュワイカート氏は、宇宙空間で地球を眺めている時に、突然、「生きとし生けるものは一つなのだ」と一瞬のうち

にわかったと言っています。

そう感じる心が元々彼の中にあつたから、それが出たのです。

あとから作られたものは一瞬のうちには出てきません。

元々内在しているから、一瞬のうちに表面化したわけです。

だから、不思議なことではないのです。

千葉県在住の井上真奈美さんのご主人は、心臓の痛みに襲われて苦しんでいました。

ご主人のお父さんが心臓病で亡くなっていたので、遺伝だから早く病院に連れて行かなくてはと周りには心配していました。

ところが、それは遺伝ではありませんでした。

彼女がお義母かあさんのことを嫌っていたため、ご主人はずっと二人の間で苦しんでいたのです。

それが心臓の痛みとして現れていたのです。

ですから、彼女が「真我」に目覚め、お義母さんのことが好きになった

ら、ご主人の心臓の痛みもピタリと治ってしまっただけでした。
彼女は、ご主人やお義母さんと、深い所でつながっていたのです。

とにかく、一刻も早く「真我」に目覚めることです。

真我とは、外から与えられる知識ではありません。

すべての人に、もともと内在する、「愛」であり、「神」なのです。

真我に目覚めることによって、すべては一つであり、全体であり、調和であること、そして宇宙は一つであることが悟れます。

外から入る知識ではなく、元々誰にもある「宇宙の心、愛の心」に目覚めれば良いだけなのです。

だから、ただそれに気づいて、魂の底から湧き上がってくる本当の自分の素晴らしさ・尊さ・感謝の心に目覚めれば良いだけのことです。

元々自分の中にあるものに目覚め、気づけばいいのです。

悟りを求めて、何十年も厳しい修行をして苦勞することはありません。

真理は極めて単純明快なのです。人間に元々そなわっている本当の自分に一瞬にして目覚める。

それだけで、人それぞれが生きる目的や意味、生まれてきた価値や使命、人の世の本当の姿に気づきます。

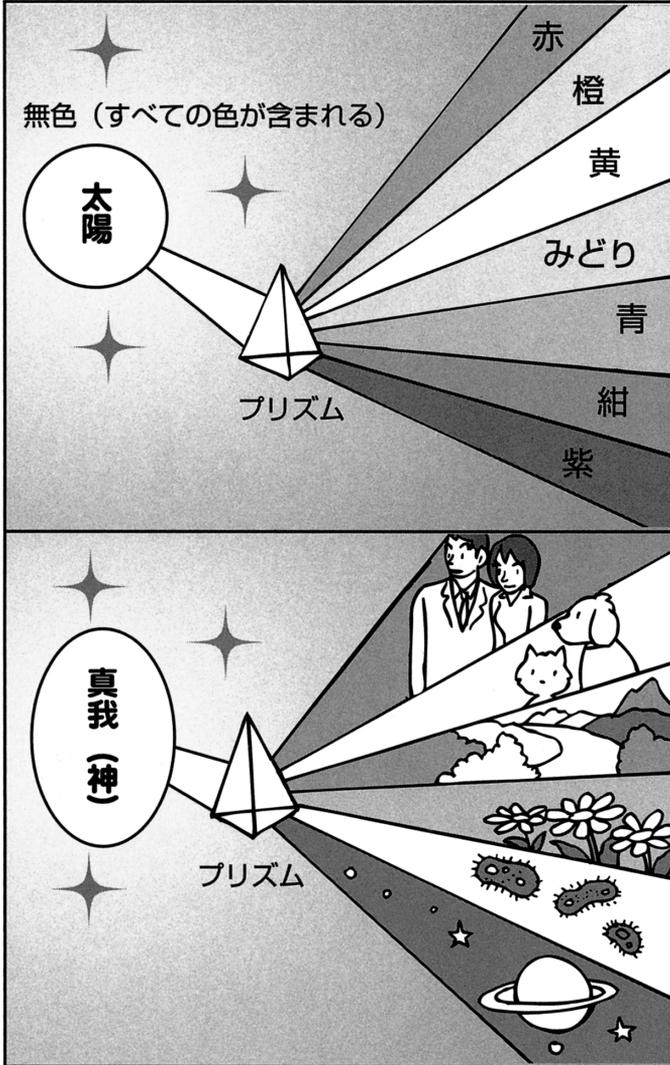
「真我」に目覚めることが、人間にとって最も大切なことなのです。

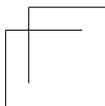
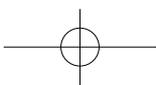
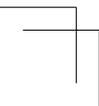
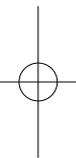
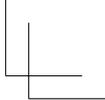
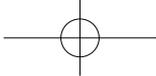
自分の中に神や仏がいるということを目覚め、自分の足で立ち、自立して、そして与える心をもつことが大事なのです。

POINT

**この世のものすべては、神と一体である。
すべては調和であり、万物は一つ。**

すべては一つ すべては調和





第

4

章

三つのフィルターを取り外す

あなたの心の一番深いところには、「真我」があります。

「真我」とは、「神さまの心・仏さまの心」そのものです。

だからあなたは、「真我」から、「神さま・仏さまの本当の姿」を見ることができません。

ただしそのためには、**目の前に被^{かぶ}さる、心の「三つのフィルター」を外さなければなりません。**

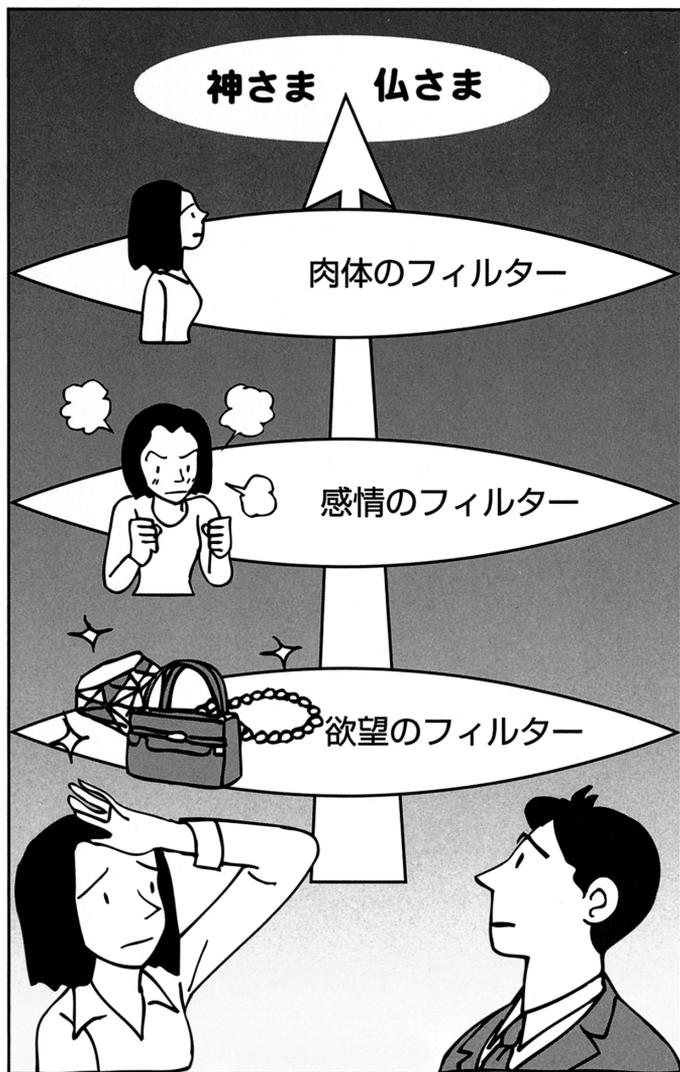
これは、色の濃いサングラスのようなものです。

私たちは、このサングラスをかけているため、光り輝く「神さま・仏さまの姿」も、屈折し乱反射し、また暗く色あせてほとんど見ることができなくなっているのです。

この心のフィルターを外すポイントは、

- ・「フィルターをとおした時の世界の見え方」。
- ・「フィルターを外した時の世界の見え方」。

心の三つのフィルターを外す



です。

この二つを比べることが必要です。

心のフィルターを外すとは、「横の法則」の視点から「縦の法則」の視点へと移って世界を見るということです。

私はその三つのフィルターを、

- ① 「欲望」
- ② 「感情」
- ③ 「肉体」

という三つの言葉に象徴させました。

では、それぞれのフィルターを通した世界像と、フィルターを外した世界像を比べていきましょう。

それによって、あなたも三つのフィルターを外すことができるでしょう。

三つのフィルターを外した時、あなたの目の前には神さま・仏さまがいるはずですよ。

「欲望のフィルター」を外す

では、「欲望」という二つ目のフィルターを取り外す作業をします。

フィルターの取り外し作業は、フィルター越しに見える世界、つまり「横の法則」の視点から見た世界と、フィルターなしで、「縦の法則」の視点から見た世界とを対比させることによつて行います。

① 「横の法則」の視点から見た世界―欲望編

まず「欲望」というフィルターをつけていると、世界はどう見えているのでしょうか。

「横の法則」の視点から見た世界をご説明しましょう。

私たちはさまざまな欲求・願望をもっています。

「お腹が空いた」「眠い」

と言った生理的なものから、

「お金が欲しい」「出世したい」

といった社会的なものまでさまざまな欲求や願望があります。

こうした「欲望」というフィルターを通して世界を眺めると、世界に存在するものは次の二種類に分かれて見えます。

1 「欲しいもの」

2 「要らないもの」

もし仮に1を赤く塗り、2を青く塗るとすれば、あなたの目の前に広がる世界は、きれいに赤と青に塗り分けられるはずで

もちろん、世界の中の赤い部分と青い部分は、時と場所によって違いま

す。

そして、赤い部分と青い部分は常に移り変わります。なぜなら、時間とともにあなたの心が動くからです。

私たち人間は、「欲しいもの」をかき集めて生きてきました。

出世競争が良い例です。

出世や名誉という「欲しいもの」を手に入れるために苛烈な競争をします。

そして、競争をつづけるうちに、競争に勝ちつづけるために手段を選ばなくなりま

す。「欲しいもの」を手に入れるのに役立つものをかき集め、「欲しいもの」を手に入れるのには、役立たないものは容赦なく切り捨てます。

この選り分けは、物や情報ばかりでなく、人間関係にまで及びます。

たとえば、自分の出世にプラスになりそうな人とは積極的に付き合い、役

に立たなかったり、逆にマイナスになりそうだったりする人とは、縁を切つていくということを平気で行う人がいるのです。

。ピンとこないかもしれませんが、子どもの非行や引きこもりもいい例だと思います。

じつは、非行や引きこもりという現象は、親の「欲しいもの」をかき集める発想から生まれています。

私は、親から子どもの非行や引きこもりのことで、相談を受けたことが何度もあります。

相談する中で、私は非行も引きこもりも原因は同じだと気づきました。

二つに共通した原因は、親が子どもに対して、「いい学校、いい会社に入つて欲しい」というような願望をもっているということです。

子どもを無理にその型にはめようとするわけです。

すると、子どもはその期待に応えようと頑張りますが、必ずしもうまくい

きません。

私のところに相談にきた男性で、かつて両親の期待のために苦しんだ方がいました。

彼は、学生時代に「いい学校に入って欲しい」という両親の期待に応えようと、受験勉強に励んだものの、受験に失敗して大変落ち込んだそうです。

そして、「自分は自分の人生を歩んでいるのだろうか」と悩んだそうです。

これは、親の願望が、チューリップの球根にバラの花を咲かせようとするようなものかもしれません。

そうになると、子どもはそこから逃避します。

非行と引きこもりは、親の勝手な願望からの逃避の二つの表現なのです。

親が子どもに対してこのような願望をもつのは、親が子どもを自分の所有物だと思い込み、子どもを使って自分が「欲しいもの」を手に入れようとするからです。

また、現在の資本主義社会は、「欲しいもの」をかき集めるといふ発想を

見事に映し出しています。

社会には、人をだましたり、法の網の目をかいくぐったりしてでも、巨額の金銭を儲けることが利口なやり方であるといっているような、金儲け主義的な風潮があります。

政治改革に逆らって既得権益にいつまでもしがみつ়く政治家などは、その象徴ともいえます。

かつてのバブルの時代に、実際にあったことです。

当時の人々は、まさに金銭欲の権化と成り下がりました。

お客様を喜ばせるとともに自分を高めるといふ商売の本質をかえりみず、土地や株への投機で、楽をして儲けようとした。

そして、結局そうやって手に入れたお金は、バブルの崩壊とともに幻となって消えたわけです。

このように私たちは、欲望を行動原理として生きています。

「欲しいもの」「役立つ」ものを赤く塗る、「要らないもの」「役立つたない」ものを青く塗るといふ先ほどの話で言えば、私たちは、千変万化する赤と青のパターンの中で生活しているとも言えます。

これでは、私たちが天然色の世界を見ているとはいえません。

たとえば、夕立の後に夕焼け空にかかった大きな虹を、青いペンキをべったりと塗ってしまえば、その美しい七色のグラデーションを楽しむことはできません。

「欲しい」「欲しくない」というのは、ほんの一つの観点にすぎません。

しかも、その基準は固定的なものではなく、欲望の基準や対象は、時代に

よっても、社会によっても、人によっても違います。

一人の人間の中でも、欲望の対象はコロナ変わります。

あなたが、その限られた観点、不確かな観点でのみ世界をとらえれば、それは、世界そのものからは程遠い世界像をもつことになります。

赤と青のみで塗り固められた絵と、高画質のカラー写真以上の差が、そこにはあるのです。

「欲望」というフィルター越しに見える世界、「横の法則」の視点から見た世界を、赤と青の例で使えば、

「常に配置が入れ替わる、赤と青で塗り固められた絵画」のようなものでありと表現できるように。

POINT

欲望のフィルターを通した世界
↓「要る」「要らない」の世界。

② 「縦の法則」の視点から見た世界―欲望編

では「欲望」というフィルターを外すと、どういう世界が見えるのでしょうか。

「縦の法則」の視点から見た世界をご説明しましょう。

「欲望」というフィルター越しに世界を見ると、すべてのものを「欲しいもの」と「要らないもの」という二種類に分別してしまうということはすでに述べました。

「欲しい」とか「要らない」という言葉は、不足を前提としています。

何か足りないから、「これは欲しい」「これは要らない」と選り分けて、手に入れようとするわけです。

しかし、「欲望」を外した世界は、**すでに満たれた世界**です。世界に存在するものは、「欲望」の対象ではなくなるのです。

「欲望」を外した時、すべてをそのままありのままに見て、そのままありのままに受け入れることができます。

たとえば、遺産相続の場面では、「横の法則」の視点を取るか、「縦の法則」の視点を取るかで、様子は百八十度違ってきます。

初めは「横の法則」の視点で、兄弟で遺産をめぐる争いをし、殺し合いに近いような喧嘩をしていたのが、「縦の法則」の視点に移った時、一転して譲り合いになってしまった例もあります。

ただし、私が「欲望」を外すという時、あなたの中のすべての欲望をなくすということではありません。

この点に注意していただきたいと思えます。

「欲望」を外すとは、ある意味では「欲望」のままに生きるということです。「欲望」を外すとは、「欲望」丸出しで生きるということです。

「え？」……首をかき上げて、頭の上に大きなクエスチョンマークが浮かんでいる読者がほとんどだと思います。
それはこういうことです。

あなたの心の中には、さまざまな欲求・願望があると思います。

心の中に、「あれが欲しい」、「これが欲しい」、「ああなりたい」、「こうなりたい」と言った、本当に多種多様な欲求・願望が混じりあい、渦巻いているのではないだろうか。

じつは、こうしたさまざまな「欲望」の奥には、一つの本質があります。

その「欲望」の究極的な本質に気づき、それに従って生きていくこと、それこそが、私が言うところの「欲望」を外すということです。

では、「欲望」の究極的な本質とは何でしょうか。

胸に手を当てて考えてみてください。

あなたが心の底から望むものは何ですか。

お金でしょうか。出世でしょうか。他のものでしょうか。

ではなぜ、あなたはそれを望むのでしょうか。

お金があれば、好きな時に好きなものを食べ、好きな服を身にまとい、好きなところに行くことができます。

出世すれば、周囲から、ちやほやされます。

社会から必要とされます。

たとえば、あなたの目の前に金の延べ棒と、一本の丸太の棒があります。

どちらか好きなほうをもらえるとすれば、どちらを取りますか。

金の延べ棒ですか。

丸太の棒ですか。

当然、金の延べ棒だと思います。

では、ここに一つの条件を付け加えます。

あなたは今、海で溺れかけています。

今にも体が沈みそうです。

そこで、同じ質問です。

さあ、あなたは金の延べ棒を取りますか。

それとも、丸太の棒ですか。

ここでは答えが変わるはずですよ。

丸太の棒ですよ。

命が大事だからです。

このように究極的なところまで自分に問いかけた時、あなたが本当に欲し

いものは何でしょうか。

物欲や金銭欲は、人に認められたいという気持ちをも、物によって満たそうとするところから生じるともいえます。

また、出世欲や名誉欲は、社会的に重要な役割を担ったり、能力や功績を認められたりすることによって、全面的で無条件の承認の代わりにしようとして湧き起こります。

人間の根源的な欲求の対象は「認められること」です。

それも、「全面的に無条件に認められること」です。

無条件の愛と言ってもいいでしょう。

その根源的な欲求が、さまざまな欲求へと形を変えるのです。

つまり、物も金も出世も名誉も、すべて愛の代替物にすぎません。

私たちは、さまざまなものを愛の代替物として追い求めます。代替物だから、これといった決まったものではなく、人によっても、時代によってもまちまちです。

出世と一口に言っても、古代・中世で出世といえば、戦いでライバルを打倒して権力を勝ち取ることでした。

欲しいものといえば、冷蔵庫・洗濯機・白黒テレビの時代もありました。流行の変化も、愛の代替物の変化と考えることもできます。

つまり、「欲望」の本質とは、愛への欲求です。

自分を愛したいという思いが、その本質にはあります。

自分を愛したい、認めたい、そのために人から認められたい、愛されたい。

それも自分を無条件に愛したい、人に無条件に愛されたいという思いがあります。

無条件の愛とは、神さまの愛、仏さまの愛にほかなりません。

神さま・仏さまの愛を求める欲求こそ、「欲望」の本質なのです。

物や人や金を求める「欲望」は、この神さま・仏さまの愛を求める究極的な「欲望」が変形したものにすぎません。

物や人や金は、世界の一部であり、世界の影にすぎません。

神さま・仏さまの愛こそが、世界の全体であり、世界の实体です。

物や人や金を求める「欲望」は、世界の一部、世界の影を求める小さな欲望、小欲です。

そして、すべての小欲の奥には、神さま・仏さまの愛、つまり世界全体、世界の实体を求める大きな欲望、大欲があるのです。

「欲望」を外すとは、「欲望」の究極的な本質に気づき、それに従って生き

ていくことだと先ほど申し上げました。

「欲望」の究極的な本質とは、大欲です。

だから、大欲に気づき、大欲に従って生きるということが「欲望」を外すということですよ。

そうすれば、それまで抱いていた小欲は自然に捨てることができるようになります。

ここで注意しなければならないのは、野望と大欲は異なるものだということです。

野望も大欲も、ともに大きな目標を手に入れようとする心であることには違いがありません。

しかし、目標の質が違います。

野望における目標は、個体の発想から生まれる目標です。

自分の個人的な欲求を満たすことを目標とする点で、普通の願望と変わり

ません。

それに対して、大欲における目標は、全体の発想から生まれる目標です。それは、全体の調和と発展を目標としているのです。

今までの「欲望」をただ単に「捨てなさい」と言われても、なかなか捨てられません。

そうではなく、より価値のあるもの、心のより深い部分で求めているものを知ってそこに向かう時、それまでの「欲望」が自然になくなります。

小銭を大事に握り締めている人も、その人に百万円の札束を差し出せば、自然に小銭を手放すことができるのと同じです。

神さま・仏さまの愛を求める大欲に従うとは、あなたの心の最も奥にある「真我」に目覚めるといことです。

あなたが真我に目覚める時、あなたがすべてを無条件に愛し、あなたがす

べてに無条件に愛されていることを体感します。

つまり、この「真我」を自覚すれば、あなたの大欲はすでに満たされていることに気づきます。

あなたはすでに完全に満たされているのです。

すでに満たされているとは、「すでに望みが叶えられた」と感謝することではありません。

あなたの望みを前提として、その望みが叶えられたと考えるということではないのです。

あなたの望みなどとは全く関係なく満たされているわけです。

ふだん私たちは自分の外側に求めています、求めるものはすべて、じつは自分の内側にあるということです。

ただそのことに気づくということです。

「欲望」というフィルターを外して見る世界、「縦の法則」の視点から見た世界とは、すべてが完全で、すべてが満たされている世界なのです。

POINT

欲望のフィルターを外した世界
↓「すべて満足」の世界。

「感情のフィルター」を外す

この章では、二つ目のフィルターである「感情」を取り外します。

「感情」とは、さまざまなものに対してあなたが抱く「これは好き」「これは嫌い」「これは怖い」と言った感情です。

① 「横の法則」の視点から見た世界―感情編

「感情」というフィルターをつけていると、世界はどう見えているのでしょうか。

「横の法則」の視点から見た世界をご説明しましょう。

ここでの「感情」とは、人や物に対する好き嫌いや、喜怒哀楽のことです。
「感情」というフィルターを通すと、世界は、「好きなもの」「嬉しい

出来事」「楽しい出来事」と言ったプラスの物事と、「嫌いなもの」「悲しい出来事」「腹立たしい出来事」と言ったマイナスの出来事に分かれます。

そして、あらゆる感情には、その感情を生む原因があります。感情の原因、それは記憶です。

心の中にある記憶が、目の前の出来事から刺激されて、感情となって現れるのです。

たとえば、何かに対して必要以上に怯^{おび}える場合は、トラウマをもっていることが多くあります。

厳格な父親に育てられた場合、父親に顔が似た人に会うと、思わず緊張してしまふというようなこともあります。

幼時体験がトラウマになっている場合もよく見られます。

トラウマを抱えている場合には、「感情は記憶によって決められている」という「横の法則」が不都合に働くことが多くあります。

人が怖いという対人恐怖症、災害などの恐怖体験によって精神的に不安定な状態に陥るPTSD（心的外傷後ストレス障害）などは、その典型的な例といえます。

トラウマは、同じような体験を繰り返せば繰り返すほど、ますます強固なものになってしまいます。

恐怖の体験も、軽いものであれば、突然だったからビクビクしただけだととらえることもできます。

しかし、似た恐怖体験を何度も繰り返すと、そこから強迫観念が生まれる可能性があります。

逆に、この横の法則の「感情は記憶によって決められている」という、「横の法則」を利用することもできません。

私が若い頃、講演会などで話をする時には、少し早めに講演会場に行って、会場の周りをランニングしたものです。

これは、自分で自分の中にあるヤル気のスイッチを入れるためです。

早朝で多少眠たくても、走れば一気に目が覚めます。

あるいは、営業でお客様を訪問する時、「これから訪問するお客様はいい人だ、素晴らしい人だ、大好きな人だ」ということを、本当にそういう気持ちになれるまで心で思いつづけたり、イメージしてから、お客様を訪問すると劇的に成果が上がります。

イメージによってウキウキ楽しい、というスイッチが入り、それが相手に伝わるのです。

このようにスイッチが入る状況に身を置くことで、自分をコントロールできます。

つまり、外側からの刺激によって、自分の記憶を呼び覚めます。

そして、その呼び覚まされた記憶によって感情をコントロールするわけですね。

「思いは記憶によって決められている」という「横の法則」を利用してしまいうわけです。

感情には、役割があります。

それは、私たちを即座に行動に導くという役割です。

感情があるから、すぐに行動できるのです。

「好き」と感じれば、自然にパッと近づく。

「嫌い」だと感じれば、パッと離れる。

感情によって、瞬時に判断できます。

しかし、感情は過去の記憶に基づいて生じるので、必ずしも正しいわけではありません。

むしろ、間違っていることもしばしばあります。

たとえば、食べ物がまずそうに見えて、食べてみるとおいしいということ
はよくあります。

初対面の人の顔が、嫌いな人に顔が似ているからといって、性格も同じわけではありません。

感情が私たちの正しい判断を妨げてしまうのです。

POINT

感情のフィルターを通じた世界
↓「好き」「嫌い」の世界。

② 「縦の法則」の視点から見た世界―感情編

では、「感情」というフィルターを取って、世界を眺めてみましょう。

感情は過去の記憶が原因となって、生じるものでした。

しかし、「縦の法則」、神さま・仏さまの法則から見れば、過去は存在しません。

だから、過去のものである記憶も存在しないのです。

「縦の法則」から見れば、過去の悲しい記憶も、辛い記憶も、トラウマも存在しないのです。

実際に「縦の法則」の視点から過去を見つめることによって、トラウマが消えたという実例を挙げましょう。

幼い頃、父親が蒸発し、兄弟の中で一人父親に似ていたために、母・祖母にひどく虐待されて育った女性がいました。

女性は、学校でもいじめられつづけていました。

彼女は、両親や自分をいじめた同級生に対して強い恨みを抱いていました。

しかし、彼女は、「縦の法則」の視点から自らの辛い記憶を見つめることで、自分の過去に対する思いが一瞬にして変わりました。

驚くべきことに、彼女は恨みが感謝に変わったのです。

彼女の言葉です。

「これまでの苦労のすべては、自分の生まれてきた意味を知るために、私が経験しなければならなかった大切なステップだったのです。そう気づいた時、これまでの辛く苦しい思い出が、すべて感謝に変わりました」

この場合、母や祖母から虐待された記憶は強く残ります。

しかし、「縦の法則」の視点からその記憶を見つめることで、母や祖母の深い愛が見えてくるのです。

それに気がついた瞬間、過去の記憶は百八十度変わります。

在日コリアンのある男性は、子ども時代に周囲の人々から、差別を受けな

がら育ちました。

その結果、「人の嫌な所、悪い所、腐ったところしか見えない」というような人嫌いになってしまいました。

しかし、神・仏の視点から人を見た時、周囲の人々の温かさを感じることができるようになりました。

感情の原因となる**過去の記憶とは、過去の出来事そのものではなく、過去の出来事を自分なりに解釈したものです。**

解釈によって、過去の記憶が明るい色や暗い色に色づけられるのです。

解釈とは、つまりとらえ方です。

物事は見る角度によって、さまざまにとらえ方ができます。

「横の法則」の視点から「縦の法則」の視点へと移るといことは、とらえ方を、それまでとはまるで異次元のものに変えるということなのです。

そして、「縦の法則」の視点こそ、「真実」をとらえる視点です。

「縦の法則」から記憶をとらえる時、思いもよらない真実の世界が開けます。

起きた事実が問題ではありません。

その事実をどうとらえるかに尽きるわけです。

過去はどこにも存在しません。

過去の事実の解釈が心の中に残っているだけです。

「感情」というフィルターを取った世界とは、過去のない世界です。

そして、恨みも、苦しみも、不安も、恐怖もない世界です。

「感情」というフィルターを外した時、すべてが神さま・仏さまであるという真実が見えます。

POINT

感情のフィルターを外した世界
↓「すべて感謝」の世界。

「肉体のフィルター」を外す

三つ目のフィルター、「肉体」は、あなたの肉体に刻み込まれた遺伝子の記憶、本能です。

① 「横の法則」の視点から見た世界―肉体編

「肉体」というフィルターをつけると、世界はどのように見えているのでしょうか。

私たちの肉体は、五感を始めとする感覚機能をもっています。

私たちは、肉体の感覚機能によって世界を認識します。

しかし、肉体の感覚機能には限界があります。

肉体が認識したり、判別したりすることができるのは、ごくごく限られた

ものです。

つまり、「**肉体**」というフィルターを通すと、**世界のごく一部しか認識することができない**ということです。

また認識できたもののしか、存在するものとして認めることができません。

そして、感覚機能に限らず、**私たちの肉体にはさまざまな限界があります。**

たとえば、**体質**は肉体の限界の一つです。

病気も肉体の限界です。

病気は、遺伝的な要因が、精神的な要因と結びついて引き起こします。

私は遺伝的な要因も含めて、すべて病気の原因は心であると考えています。

「病は気から」という言葉通りなのです。

たとえば、親がガンになったら子どもガンになりやすいのです。

また、親が高血圧だったら、子どもも高血圧になることが多いのです。それは、親と子の性格が似ているからなのです。性格が似ているから、同じ病気になる可能性が高いということです。

「病は気から」ということをよく示す例があります。

私を訪ねてきたある青年の例です。

青年はレスリングのチャンピオンになったこともあるという話でしたが、彼に会った時、私は本当に驚きました。

彼は、ひどくやせ細っていました。

身長が一メートル八十センチあるのに、体重が四十三キロしかなかったのです。まさに骨と皮だけの状態です。

理由を聞くと、彼は両親の話をしてくれました。

彼が子どもの頃、両親はいつもケンカをしていたそうです。

そして、父親が母親を追い詰めるのを見て育ちました。

そして、心労のためか、母親は亡くなりました。

彼はこう断言しました。

「お父さんがお母さんを追い詰めたから、お母さんは早死にしちゃったんです。お母さんを殺したのは親父だ！」

父親と離れて一人暮らしをしている彼ですが、父親に対する恨みは消えていませんでした。

そして、その父親に対する恨み・憎しみの心が、彼の肉体をも蝕みました。彼は、食事ができなくなってどんどん痩せてしまいました。

ついには生活保護で暮らすようになってしまったのです。

肉体を形作る遺伝子を通じて先祖から引き継がれるトラウマもあります。

私に相談に見える方の中には、時々在日コリアンの方がいます。

そして、在日三世の方の中には、たとえ直接差別を受けた経験がなくても、差別に対するトラウマを抱えていることが多くあります。

原因としては、両親や祖父母の言動を通して、差別の記憶を受け取っているということもあります。

しかし、そればかりでなく、細胞レベル、遺伝子レベルでトラウマを引き継いでいることが少なくありません。

そして、周囲の日本人に恐怖心をもってしまうのです。

「肉体」というフィルターを通して、病気や苦しみが現れているということです。

そして、あなたの「肉体」は、あなたの記憶、あなたの心の影です。

あなたの記憶を形作る原理は何でしょうか。

それは、自己保存の原理です。

自分を守る心と言い換えてもいいでしょう。

つまり、「**肉体**」というフィルターの**正体は、自己保存の原理**です。

これは、「自分を守るために必要なもの」と「不必要なもの」、そして「有

害なもの」とを分類するフィルターです。

このフィルターが、分厚く、色の濃いものになると、私たちは自己中心的な行動に走ることになります。

そして、結果としてさまざまな不調和を抱えてしまうのです。

POINT

肉体のフィルターを通じた世界
↓「安全」「危険」の世界。

② 「縦の法則」の視点から見た世界―肉体編

「肉体」というフィルターを外して、世界を眺めるとどうでしょうか。

こう言うと、「肉体なしで、世界を見ることなどできるのだろうか」と疑問をもつ方も多いでしょう。

答えは「イエス」です。

ただし、「肉体」というフィルターを外すということは、必ずしも肉体を脱ぎ捨てるということではありません。

肉体をもったままでも「肉体」というフィルターを外すことは可能です。

私たちの五感を始めとする肉体の感覚機能は、どこまでいっても限界があります。

いわば小さな窓です。

世界を覗くための本当に小さな窓です。

感覚器官は世界のほんの一部、一つの側面しかとらえられません。

しかし、**肉体の感覚機能も、使い方によっては、世界の全体をとらえるために生かすことができます。**

その意味で、感覚機能も無限の可能性を秘めているわけです。

たとえば、ロケットで宇宙へ飛び、上空数百キロの高さから地球を見た時に、地球は一つだということに一瞬で気づくことができます。

それをとらえるのは視覚です。

小さな窓から少し離れていろいろな角度から覗き込めば、それによって全体が見えてきます。

私たちは、限られた感覚能力しかもたない井の中の蛙です。

普通にしていたら、井戸の中のことしかわかりません。

でも、井戸ごと宇宙に飛んでそこから地球を見れば、大海を知ることがで

きます。

感覚機能の限界を知ることが、謙虚であることにつながります。

でも謙虚で終わる必要はありません。

小さな窓からでも、大海を見ることが十分可能なのです。

地球を見ることが可能なのです。

それによって、本来の完成されたものを自覚することができます。

人間の視力には限界があります。

でも人間は顕微鏡を作り、ミクロの世界を見ることができるようになりました。

自然科学の歴史を省みれば、人間は五感を基礎にして、さまざまな観測器具を使って、宇宙の神秘を探索してきたという事実があります。

人間は、自分の感覚機能を生かして、その限界を超えていくことができます。

のです。

「縦の法則」の視点から世界を眺める時、人間は病気も超越していくことができます。

元々、持病に悩んでいた人の病状が好転したり、消えてしまったりというような奇跡的なこともたくさん起こります。

たとえば、十二指腸潰瘍が治った、子宮筋腫が消えたという事例もあります。

これは、「縦の法則」の視点に立つことで、「肉体」というフィルターの原因となっている記憶、トラウマが清算されるからです。

さまざまな記憶、トラウマがさまざまな病気の原因になっています。

そうした記憶、トラウマがリセットされるわけです。

それによって、恒常性という生命の元に戻ろうとする働きが動き出し、健

康な状態へと戻っていくのです。

記憶やトラウマは、「縦の法則」の世界では実在しないもの、幻想・妄想です。

言ってみれば、強烈な思い込みです。

この思い込みが、病気という形の別の思い込みを生んでいるのです。

「縦の法則」の視点で見れば、病気というものはそもそも存在しないのです。

そのことに本当に気づけば、病気も一瞬で消えます。

たとえば、顔面神経痛で、目が斜めになり、鼻が横にずれ、口が曲がっていた方がいました。その方が、全く普通の顔に戻りました。

心の歪みが肉体に現れていたのです。

しかし、歪みの原因であった心のフィルターを外した瞬間、真実に目覚め、元に戻ったのです。

また、八十三歳の全盲の老人が、目が見えるようになった例もあります。堀口貞夫さん（仮名）は、当時から遡って十七年前、原因不明で視力を失いました。

堀口さんは「目が見えなくなったことによって、人の心が良くわかるようになりました。目が見えなかった時に見えなかったものが、良く見えるようになったのです。心の目が開いたんです」

そういう話をして、人々に本当の幸せについて説いていったのでした。

そんな堀口さんの話を聞いて、ハンディキャップを背負っていたり、悩んでいた多くの人たちが感動をし、勇気づけられました。

「神様が私の目を見えなくしたことに、今感謝しています。なぜ私の目を見えなくしたかの意味がよくわかります。今は本当に幸せです」

とおっしゃるのです。

しかし、堀口さんの話しを聞いているうちに、一つだけ引かかるものを

感じ、私は直感的にこう言いました。

「お話、大変感動しました。

しかし、一つだけ気になるところがあります。

『神様が私の目を見えなくしたことに、今感謝しています』とおっしゃいましたね。

しかし私は、神が目を見えなくすることはないと思います。

目が見えるように作られているんです。

むしろ目が見えるようになるということが、神の意に沿うということじゃないでしょうか。

そして、目が見えるようになることで、人々に喜びを与えることができるんじゃないでしょうか」

私はつづけて言いました。

「堀口さんは目が見えないことを喜んでいますが、目が見えることを願うこ

とではないでしょうか。ご自分の顔や奥さんの顔、そしてお孫さんの顔を、しっかりとその目で見て、それから人生を終えることではないでしょうか」

いつの間にか私は、テーブルを叩きながら、心に浮かんで来る言葉を全力で話していました。

すると、その間私の話をじっと動かずに聞いていた堀口さんが、突然「あーっ！」と大きな声を上げました。

「佐藤さん。あなたの顔が見える！」と言いだしたのです。

何も見えなかったはずの目が、光をとらえ、私の顔の輪郭までもとらえ始めたのです。

「そうですね、見えるんです！ 百パーセント信じてください。目が見えるという命のスイッチを入れてください。九十九パーセントではだめです。百パーセント信じることでず」

翌朝、堀口さんが嬉しそうに早足で私の所にやってきました。

「佐藤先生。ぼくは先生が見えるから、まっすぐに先生の所に来たんですよ！」

さらに堀口さんは一気にまくし立てました。

「洗面所で朝顔を洗った時に、何年ぶりかで自分の顔がぼやーっと見えるようになったんですよ！」

二階の寝室から下に降りる時にも、杖も持たずに降りられたんですよ。

それを見て驚いた女房の顔も見えたんですよ！

「こうやって女房に手を引いてもらわなくても歩けるんですよ！」
本当に嬉しそうな顔で言いました。

「神の働きというのは、元に戻ろうという働きなのです。

モノを上を上げたら、下に落ちる働き。

川は流れて、海に自然と戻る働き。

神の働きというのは、元に戻ろうという働きなのです。

私たちの身体の中には、世界最高の名医がいるのです。その世界最高の名医を心から百パーセント信頼し切るのです。

あなたは何もしなくていいのです。

ただ百パーセント信頼し切ればいいのです」

私には、堀口さんがなぜ目が見えなくなったのかもわかりません。

堀口さんは、多くの方から尊敬され、慕われている通り、心が優しくきれいな方です。

そして人生の道を深く追求されている方です。

それ故に、人の嫌な面を見たくない、汚いところは見たくない。

その思いが目を見えなくさせていたのです。

医者に診てもらっても、原因不明と言われる。

原因不明ではないのです。

自分の強い思いが叶っただけなのです。

汚い所を見たくないという思いの代わりに、人々の素晴らしいところを見たいという強い思いがあれば、必ず見えるようになるはずなのです。

堀口さんは、「欲望はすべて実現する」という「心の法則」に従っただけだったのです。

それに対して、私が訴えたのは「縦の法則」（神・仏の法則）です。

神は目は見えるように作っている。だから神の法則を使えば、元通りに見えるはずなのです。

そしてその「**縦の法則**」（**神・仏の法則**）は、自分の「**思い込み**」**「観念」を手放した時に働くのです。**

また、現代において新しい病気が発生しているのは、さまざまな記憶やトラウマをもった人がいるからです。

心の歪みの種類が多いほど、病気の種類は増えます。

しかし、すべての病気は「縦の法則」である、神さま・仏さまから見れば、幻想にすぎないのです。

「縦の法則」から見れば、疲労が溜まるといふこともなくなっていくはずで
す。

現代人の疲労の多くは、精神的な疲労です。

「縦の法則」の視点でいけば、余計な心配や不安、ストレスはなくなり
ます。すると精神的な負担が軽くなり、疲労もほとんどなくなるはず
です。

「縦の法則」から見ると、「肉体」というフィルターの根本原因である自己
保存の原理も、問題ではなくなり
ます。

自己保存の原理を、すべてを愛する原理へと変えていくことができるから
です。

たしかに自分だけを好きになりすぎ、自分の利益だけを追い求めると、自
己中心のだと人から評価されます。

それは、エゴイズムかもしれないかもしれません。しかし、一步深いところからとらえれば、人間にはエゴイズムが必要です。人間はエゴイズムがないと死んでしまいます。

われわれ人間は、あらゆる生物・植物を食べて生きています。生きるために他の命を殺しているのです。

たとえば、ライオンは肉食ですからシマウマを殺して食べます。

シマウマは草食ですから、大地に生えた草を食べます。

一見すると、シマウマよりライオンが悪いように思えるかもしれませんが、じつは同じなのです。

そのライオンの死骸が大地の肥料となり、草となってシマウマに供給されているだけなのです。

いわゆる食物連鎖です。

それを人間の浅知恵で、シマウマが可哀想だと決めつけることはおかしい

といえます。

生物にエゴイズムがなければ、食物連鎖のシステム全体が立ち行かなくなりません。

エゴイズムによって、地球上に数百万種と存在するといわれる生物全体が存続しているのです。

もちろん、エゴイズムだけで行動すると、奪い合いになります。

したがって、エゴイズムの愛を、より大きな愛に広げていかなければなりません。

自己愛を、隣人愛へ、そして人類愛、地球愛、宇宙愛へと、愛を広げていくということなのです。

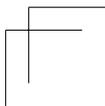
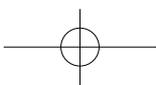
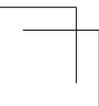
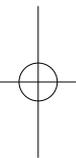
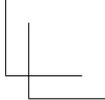
自分が世界に対する愛に溢れていると、相手の愛が見えてきます。

フィルターを取って、世界を見ると、世界全体が愛そのものであるということがわかります。

色つきのフィルターを取った透明な目とは、自らが愛に溢れることによって、世界の本質が愛であることを見抜くことができる愛の目なのです。

POINT

肉体のフィルターを外した世界
↓すべて「健康」の世界。



第

5

章

神さま・仏さまの本当の姿

「縦の法則」に沿うということ

ここまでで、あなたは三つのフィルターを外す作業をしました。

「神さま・仏さまの姿」を、あなたの目から遮る三つのフィルターを取り除いたのです。

今あなたの目の前には、「神さま・仏さまの姿」が見えてきたはずですが、

繰り返しますが、「神さま・仏さまの本当の姿」とは、あなたの心の奥に存在する「本当の自分（＝真我^{しんが}）」です。

あなた自身が、「神さま」「仏さま」であり、愛そのものの存在なのです。

さて、あなたは、神さま・仏さまの本当の姿に出会いました。

しかし、ここがゴールではありません。

あなたは、確かに「神さま・仏さまの本当の姿」を見ましたが、まだおぼ

ろげに垣間見たという程度でしょう。
まだ、ピンとこないかもしれません。

それは、まだ頭の理解の段階だからです。

神さま・仏さまの正体をよりはつきりと見て、実感として「そうだな」と
思えるためには、必要なことがあります。

それは、実践です。

実践とは、具体的には「縦の法則」に沿うということです。

「縦の法則」に沿うとは、「縦の法則」から見た世界に合わせて行動する
ということです。

日常生活において私たちは、「欲望」や「感情」や「肉体」に従って、行
動しています。

ともすると、毎日「欲望」、「感情」、「肉体」に振り回されて生活すること

になります。

これは、「横の法則」に従って行動するという事です。

「地位を得るために人を蹴落とす」

「一時的な怒りに任せてケンカをする」

「体が要求するままに毎日酒を飲み、タバコを吸う」

と言った行動は「横の法則」に従った典型的な例です。

「横の法則」「縦の法則」を、カヌーでの川下りにたとえてみましょう。

川の流れは、「縦の法則」、宇宙の法則です。

「横の法則」に従うとは、川の流れに逆らってオールを漕ぐということです。

これでは、疲れるし、ストレスもたまります。

それに対して「縦の法則」に従うとは、川の流れに沿うということです。

とても楽な状態です。力を入れる必要がありません。

ですから、ストレスもたまらないのです。

川の流りに身を任せ、岩にぶつかりそうになった時だけ、オールを使って、進行方向を調整するわけです。

では、「縦の法則」に沿うとは、具体的にどういう行動を取ることなのか、
しょうか。

「縦の法則」に沿った行動には二つの基準があります。

「縦の法則」に沿った行動の二つ目の基準は、調和です。

全体の流れに、自分の動きが沿っているかどうかということです。

より全体的な視点に立って、全体の調和を図るような動きが「縦の法則」
に沿った行動です。

夫（または妻）の動きに、自分の動きが合っているかどうか。

上司の意図に、自分が従っているかどうか。

会社の理念に、自分が帰一きいつしているかどうか。

より大きなレベルで言えば、こういうことになります。

経済政策は、世界経済の流れに合っているかどうか。

環境政策は、生態システムに沿っているかどうか。

このように、全体との調和が一つの基準になります。

そして、最高レベルで言えば、宇宙全体の流れに沿うということです。

行動する中で、周囲の人すべてと衝突がなければ、それは「縦の法則」に

沿った行動と言えるでしょう。

「縦の法則」に沿った行動の二つ目の基準は、自分が考えることを優先させないということです。

人間の脳が考えることに偏重することが、さまざまな不調和の原因になります。原子爆弾などの発明はその最たるものです。

私たちは、自分の頭で考えることを最優先にするのではなく、「縦の法則」、つまり、神さま・仏さまの法則を知る必要があります。

縦の法則に従う

川が海に向かって流れるのは、宇宙の法則である。
流れに逆らえば思うように進まない。
宇宙の法則に身をまかせれば、すべては調和へと
向かう。

川の流れと反対にこぐ
(=法則に逆らう)



不調和の世界



川の流れにそう
(=法則に従う)



「縦の法則」を知るといふのは、何も難しいことではありません。

「知る」というよりも、「見る」と表現したほうがいいかもしれません。

「考える」のではなく、「見る」ことです。

元々あるものに気づくということです。

人体も生態系も人間が作ったシステムではありません。

人間がそのシステムを動かしているわけでもありません。

そこに働く大いなる意志、自分が生かされているのを見て、そこから行動するということです。

「全体と調和する」ということ、そして「考えるのではなく見る」ということが「縦の法則」に沿う行動の二つの基準です。

では、それはどのような行動なのか。

「社会」と「個人」という二つのレベルで、「縦の法則」に沿う行動を次に具体的に説明しましょう。

それぞれの個性を生かす理想の家族

「キレル子ども」「親に暴力を振るう子ども」「引きこもり」「不登校」、すべて親の責任です。

現代の比較的豊かな時代背景も、原因の一つなのでしょう。

原因は、子どもを過保護に育てる親にあります。

成長すれば、親の言う通りにはならないのは当たり前です。

子どもは、親が放っておいても育つという発想で育てるべきです。

親は、子どもに願ってはいけません。

子どもの資質が最大限に生きますようにという願いであれば構いません。

しかし、「こうなって欲しい」と願うのは、もつてのほかです。

それは、親の思っている勝手な理想にすぎません。

親の理想と、子どもの資質は全く違うのです。

新しい意識の時代の家族とは、どのような家族なのでしょう。

私はこう思います。

家族が、**それぞれの個性を生かせるような家族です。**

一人一人の個性が生き生きと発揮されていて、一見、それぞれがバラバラのようである、調和している世界です。

個性を生かすと一見バラバラに見えます。

しかし、**全体では調和がとれているという姿です。**

家族それぞれが個性を生かして、やるべきことをやっている。

しかし、全体ではとても調和がとれている、仲のよい関係ということ。

個性はバラバラでいながら、いざとなったらすぐに一つにまとまるという関係や結びつき、これが新しい意識の時代の家族です。

家族がバラバラだと思ったら、まず「本当の自分（＝しんが真我）」を知る努力をしてみることです。

一人が真我に目覚めれば、水にたらししたインクの一滴が、水面をサーッと広がっていくように、その影響力は瞬く間に全体に広がっていきます。

こんな例があります。

ご主人は、何でも思い通りにならないと機嫌が悪くなる性格。

奥さんは、自分を押し殺して従ってきたと言います。

しかし、心の中ではご主人を責めつづけていました。

一人娘が精神的に自立できないことも悩みの種です。

真我に目覚めた彼女は、どう変化したと思いますか。

ご主人に自分の気持ちを素直に表現できるようになったそうです。

ご主人はそれ以来、人が変わったように彼女に優しくなったといいます。

それだけではありません。

悩みの種の娘さんまでも変わりました。

娘さんは、今まで口に出さなかった悩みを母親の彼女に打ち明けるようになったのです。

真我に目覚めた母親の彼女の言葉です。

「家族ってバラバラのように思えても、夫婦・親子は強い絆でちゃんと結ばれていたんですね。そのことを改めて気づかされました」

POINT

**理想の家族⇨それぞれの個性を生かしつつ、
全体が調和している家族。**

仕事の本質とは

「何のために仕事をするのか」

そう問われたら、あなたは何と答えますか。

「お金を手に入れるため」が答えだとしたら、それは個体意識での考えだという事です。

「人に喜ばれることをするのが仕事だ」と説く人もいます。

確かに、「お金を手に入れるため」という答えよりはいいでしょう。

しかし、これも仕事の一側面を見ているにすぎません。

人に喜ばれるだけでは、仕事全体を把握しているとはいえません。では、「縦の法則」に沿った仕事は、どうとらえることができるのでしょうか。

仕事の本質とは何か。

それは、人が喜び、自分も喜び、周りも喜び、社会も喜び、そして、**それがすべて宇宙のためになっているということ**です。

すべての人が喜んでいるということは、すべてのことがうまくいっているということ

この条件を満たす仕事こそ、本当の仕事です。

ですから、「仕事」＝「調和」と言っても良いし、「仕事」＝「愛」と言っても良いわけです。

今、バブル経済時代の後遺症に悩んでいる人や、株や土地価格の暴落、円高円安などで悩んでいる人が少なくありません。

中小企業だけでなく、大企業もさまざまな問題に直面しています。

こういう状況を見て、仕事の転換期、経済の転換期などという人もいます。

これからの時代は、目先のことを考えてお金儲けする時代ではありません。

せん。

目先のことだけを考えて大儲けした人が偉いとか、素晴らしいと言いつづけているかぎり、現在の経済問題も永遠に解決しません。

考えてみると、経済問題がどうの、土地問題がどうのと言われていますが、どんな金持ちだって寿命が尽きれば死んでいかなければならないのです。

巨万の富を築いても、死ぬ時には全部置いていかなければなりません。

土地の所有権を各々が主張し合ったとしても、元々土地は地球のものであり、宇宙のものなのです。

ですから、これからは今までのやり方を超越した展望が必要になってきます。

二十一世紀は、宇宙単位・世界単位・全体単位で物事を考える仕事が進め

POINT

仕事の本質＝愛と調和と喜びの実践。

られてきます。

奪い合いから、与え合いの豊かな時代へ

日本を支える各分野において、「縦の法則」に沿うとは、具体的にどのようなことなのでしょうか。

政治、経済、医療、教育という特に国家の基幹である四分野について、要点だけをおさえて見ていきましょう。

まずは政治についてです。

これからは、日本という一つの国だけの単位でものを考える時代ではなく、なつてきています。

かつては、日本という個の単位で考えた結果、愛国心に燃えて戦争になりました。

「愛国心」という言葉には、悪いイメージがつきまといまいます。

しかし、愛国心自体は悪くありません。

ただ、自国に対する愛では視野の狭い考えです。

愛国心ではなく、愛地球心、愛宇宙心にならなければなりません。
そうなれば、他の国家を奪ってやろうなどは考えなくなくなります。

地球全体を見渡すレベルに立って、どうするかを考えれば、地球はずっと住みやすくなります。

さらには、宇宙レベルに立って全体をどうするかを考えれば、アイデアは無限に湧いてくるのです。

日本は、廃墟から立ち上がり、何もなかったところからものを生み出した実績があります。

その原点に立ち返って世界に散らばり、世界中を住処すまかにすればいいのです。

そして、世界の人々に尊敬される人間になり、貢献すればいいのです。
「世界は一つ。平和にするしかないのだ」

という考えに立てば、どこだって住処すみかはあるはずです。

次は経済です。

「縦の法則」に沿った世界の経済とは、どのようなものでしょうか。

それは、一昔前の奪い合いの世界とは全く異質なものです。

つまり、与え合いの経済です。

これからは、与え合いの中での自由な社会です。

奪い合いとは、「個体」対「個体」という次元です。

自分が豊かになるために、相手の分を少しでも奪おうという世界です。

しかし、「すべては一つ」です。

森の木の一本一本は、ばらばらに立っているように見えますが、根を支える土壌は一緒です。

その土壌の栄養分が不足すると、木はみんな枯れてしまいます。

樹木ばかりではありません。

動物も植物も生きとし生けるもの、あらゆる生命体は宇宙の根っこでつながっているのです。ですから、相手から奪つても意味がないのです。自分のものを奪うということなのですから。

では、医療はどうなるでしょう。

現代人は病気になるのと医者や薬に頼ろうとします。

しかし、病気は医者が治すものでもなければ、薬が治すものでもありません。医者や薬は、あくまでも病気を治す手伝いをするだけです。

あまり頼りすぎると、かえって知らず知らずのうちに、病気を引き寄せてしまうのです。

肝心なのは自分自身です。

当人の病気を作った根源をつきとめ、そこから病気をなくしていくということが一番大事なことです。

端的に言えば、病気の根源は業・カルマです。

業・カルマは闇のようなものでしたね。

ですから、病気を消すには、宇宙意識に目覚め、自分が愛そのもの・光そのものの存在だということに気づくことです。

自分が神・仏そのものであると目覚めた瞬間に、最高最良の治癒力が身体から引き出されます。

その最高最良の治癒力が、病気の根源である闇を一瞬にして消滅させるということです。

最高の名医はあなた自身の中にあります。

病気になっても、不安に感じることはありません。

愛と感謝の気持ちでいればいいのです。

それが自分で病気を治すコツです。

では、教育はどうでしょう。

まず、教師について思うところを述べてみます。

現在の教育制度化では、教師もサラリーマン化しています。

自分の仕事に夢や希望をもてなくなっている教師がいたとしても、おかしくありません。

教育は、あらゆる人間生活の根源です。

ですから、教師の意識が低いとしたら、早急に対策を講じるべきです。

これからの時代には、人間本来の心を含めた構造を知り、その使い方を理解して、自分から進んでそのことを実践していくような人を教師に選ぶようにしなければなりません。

生徒が百人いたら、百人ともそれぞれの顔も才能も違います。

役割も当然違います。

教師の意識が進んでいけば、一人一人の生徒にどんな才能や特性があるのか、わかってくるはずですよ。

生徒の個性を生かせる教師が増えてきたら、未来の世界は大変素晴らしいものになるでしょう。

次に、教育方法について考えてみましょう。

今までは、「知識をインプットする時代」でした。

これからは、「命の働きや各人の個性をアウトプットする時代」になっていくでしょう。

従来の教育とは、そのあり方も根本的に違います。

- ・人と比べない。
 - ・人間の個性、持ち味を生かす。
 - ・自分らしく生きる。
- などです。

内から外に向かって心を開く、個性を出す、特性を磨くという時代です。

まず、「本当の自分」を知り、生きる使命を発見してから個性を生かし伸ばす教育を進めます。

新しい意識の時代にふさわしい、高次元の愛の意識に目覚めた、ユニーク

で個性あふれる人たちがどんどん出てくるでしょう。

POINT

政治は「愛宇宙心」の政治へ。
経済は「与え合い」の経済へ。
医療は「身体の治癒力を引き出す」医療へ。
教育は「個性をアウトプットする」教育へ。

小聖は山で悟り、大聖は街で悟る

心の世界を追求していく上で、陥りがちな落とし穴があります。

一般的な「悟り」概念に、山で座禅をしたり、瞑想したり、心の世界の知識を身につけたりといったものがあります。

しかし、そうやってさまざまな心を追求するところに出向き、また、何百、何千という心に関する書物を読んだ結果、むしろ、世間から浮いた存在になってしまっているのです。

口では、立派な心の知識を並べ立てても、全く仕事ができない。

愛、調和が大事だと知っていながら、夫婦喧嘩が絶えない。

座禅や瞑想をしても、借金問題に悩まされつづける。

人間関係はぐちゃぐちゃ……というように、知っていること言っていることと、やっていることのギャップが激しくなってしまうのです。

瞑想や、心の知識を身につけるのが悪いものではありません。

しかし、大事なことは実践なのです。実践を生かすことなのです。

私は、「**真我の隣に実践あり**」と言っています。

人里離れた山奥で悟ったつもりになっても、それは本当の悟りとは言えません。

街の中でのドロドロとした社会の中で、日常生活の中で、現実の人間関係の中で、悟りを生かしてこそ本物なのです。

本で心の知識を知っただけで、お給料が上がるのですか。

ただ頭を丸めても、日常のごたごたは解決すると思いますか。

本当の出家というのは、日常の中で悟りを生かし切ることです。

実践で使えなければ本当の悟りではないのです。

観念の悟りではなく、真我を体感し、その心で実生活のさまざまなことに向かつていくのです。

真我は愛です。

ですから、**本当に真我に目覚めていったら、愛から出る知恵が自然と沸き出てきます。**

そして、人に対する思いも、仕事に対する姿勢もすべて変わってきます。

その結果、人間関係の問題も、仕事の問題も、そして、健康の問題も、家族の問題も、すべての問題がそこから見事に解決していくのです。

真我に目覚めることによって、本当の悟り、実践に役立つ究極の悟りを得ることができるとのことです。

「小聖^{しょうせい}は山で悟り、大聖^{たいせい}は街で悟る」という言葉があります。

街の中で悟りを得ていくということが、最も大切なことなのです。

真我の実践こそが本当の悟りなのです。

POINT

本物の悟りは、実践で日常生活に生かせること。

エピソード

今、あなたの目の前には、私たちが手を合わせていたものの実態、**神さま・仏さまの本当の姿が見えてきたはず**です。

当然、最後までしっかりと読み、さらには、各項で言わんとすることがあなたにどれだけ腑に落ちたか、その度合いによって、「神さま・仏さまの本当の姿」の見える鮮明さは変わってきます。

もうすでに、**世界の見え方が一変し、その素晴らしさに圧倒**されているかもしれません。

出会う人、直面する出来事に対して、**心の奥から湧き上がる愛と感謝に感動**されているかもしれません。

どうですか？

気がついたら、心のモヤモヤ、悩み、不安、恐怖、そんな感情が消えていた。心がスーッと軽くなって、そういえば爽やかだということもあるでしょう。昨日まで、あなたの目の前に覆いかぶさり、「神さま・仏さまの本当の姿」を遮っていたフィルターフィルターの存在がはつきりわかっただけでも、あなたの生活、人生は大きく素晴らしい方向に変化していきます。

しかし、その度合いにかかわらず、ここまでしつかりと読み進めてきたあなたは、明らかに読む前のあなたとは別人になっています。

なぜなら、真実は、あなたの中にあるからです。

もうすでにお気づきかと思いますが、私は、あなたに何かをお教えしたわけではありません。

ただ私は、**あなたの心の中に、「神さまの本当の姿・仏さまの本当の**

「姿」を見ることのできる素晴らしい力が内在するという「真実」を知っている。

そして、それを引き出すスイッチを入れるお手伝いを、本書を通してさせていたただいただけなのです。

ですから、本書は知識習得のための本ではありません。

あなたの中にある、無限の財産をたくさん引き出すために、どうぞ今後何度も何度も読み返してください。

私は、さしあたって、**立てつづけに最低五回はお読みいただくことをお勧めします。**

しかしその結果、あなたが、どれだけ素晴らしい体験をしても、あえて言わせていただきたい。

「まだまだ、そんなものじゃないですよ」と。

なぜなら、あなたに内在する黄金の宝物は、無限なのですから。

私は、約三十年にわたって、心の学校を主宰し「本当の自分」に出会うお手伝い、真我開発の指導を行っています。

私が開発した「真我開発講座」は、真我を一日も早く体感し、その心を現実の生活や仕事に即、生かしていく研修です。

これを、私は役割としてやらせていただいています。真理を求める気持ちにはあなたと同じだと思っています。

真理を求めるためには、私が何かを教え諭すことではなく、「真我（＝本当の自分）」に目覚めた人たちが、その結果、生活や仕事がどうなったのか、という「実証」だけが頼りなのです。

過去、私と縁のあった方が「本当の自分」に出会った結果として、仕事面・経済面、夫婦、親子、職場等の人間関係面、健康面、そして生きる目的・役割・使命・天命の発見など、およそ奇跡としか思えない数々の体験が多くの方々によって「実証」されています。

本書によって私と出会ったあなたには是非、究極の真我の体感をされて、素晴らしい最高の人生を実現していただきたいと思っています。

世の中を短期的に変えるには、政治の力が必要です。

世の中を長期的に変えるには、教育の力が必要です。

教育の力とは、教育のあり方といってもいいと思います。

教育のあり方こそが、人間を変えていくのです。

さらに根源的に変える力は、宗教によるものです。

といっても、何度も申し上げましたように、私がここでいう宗教とは、既成の宗教団体を指すのではないことは、言うまでもありませんし、私も宗教団体との関わりは一切もっていません。

ここでいう宗教とは、今までの狭い教義、概念を超えた「生命を生かすこと」であり、「宇宙次元の意識に目覚め、宇宙の中で生かされている自分の存在に目覚める」ということです。

「ああ、神さま！ 仏さま！」

冒頭に出てきた、この「神さま・仏さま」に救いを求める叫びの聲が、愛に満ち溢れた「神さま・仏さま」への感謝の言葉に変わっていくことを祈って。

佐藤康行